出雲市湖陵町板津土地区画整理事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

板津焼山遺跡

2013年3月

出雲市教育委員会

序

本書は，出雲市湖陵町板津土地区画整理組合から委託を受けて，平成22年度に実施した出雲市湖陵町板津土地区画整理事業予定地内に所在する板津焼山遺跡の発掘調査の成果を記録したものです。

板津焼山遺跡は，東に神西湖，西には日本海を望む出雲市湖陵町北西部の西浜地区にあります。この地区には砂丘が広がり，これまではその厚い砂の下に遺跡があるとは想像されていませんでした。ところが今回，縄文時代から奈良時代までの遺物が出土したことにより，砂丘の下に昔の人たちの活動の痕跡が埋もれていることがわかりました。

本書が，地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後に，発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や，関係者の皆様，ことに出雲市湖陵町板津土地区画整理組合様に厚くお礼申しあげます。

平成25年（2013）3月

出雲市教育委員会

教育長　中尾　一彦

例　言

１．本書は平成 22 年～ 24 年度に出雲市教育委員会が実施した，出雲市湖陵町板津土地区画整理事業に伴う板津焼山遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。平成 22 年（2010）度から 23 年（2011）度にかけて発掘調査を実施し，平成 24 年（2012）度に調査報告書を作成した。

２．調査は，下記の体制で実施した。

調査地及び調査面積　出雲市湖陵町板津 717 番地外 103 筆　801㎡

調査体制（発掘調査）

事務局　花谷　浩（出雲市文化環境部　学芸調整官）

石飛幸治（　　同　　文化財課長　平成 23 年３月まで）

福間　浩（　　同　　文化財課長　平成 23 年４月から）

景山真二（　　同　　埋蔵文化財係長）

調査員　石原　聡（　　同　　主事）

発掘作業員　伊藤　伸・大輝正人・奥田利晃・金森光雄・新田幸男・周藤俊也・星野篤史

調査体制（報告書作成）

事務局　花谷　浩（出雲市文化環境部　学芸調整官）

福間　浩（　　同　　文化財課長）

宍道年弘（　　同　　課長補佐兼埋蔵文化財１係長）

曽田辰雄（　　同　　主任）

調査員　石原　聡（　　同　　主事）

室内整理作業員　飯國陽子，鵜口令子，妹尾順子，中島和恵

３．本書の執筆・編集は，曽田辰雄・糸賀伸文（文化財課臨時職員）の協力を得て，石原が行った。

４．本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり，方位は座標北を示し，レベル高は海抜高を示す。

５．本書で用いた遺構記号は，次のとおりである。

SI：竪穴建物　SP：柱穴・ピット　SK：土坑　SX：その他

６．本書に掲載した遺物の実測は，岸道三，和田みゆきの協力を得た。

７．本書に掲載した写真の撮影は，石原が行った。

８．本報告書掲載の遺物及び実測図，写真は出雲市教育委員会が保管している。

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過……1
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　発掘作業の経過……1
第２章　遺跡の位置と環境……2
第１節　遺跡の地理的環境……2
第２節　遺跡の歴史的環境……2
第３章　調査の成果……6
第１節　調査の概要……6
第２節　Ａ地区の調査……7
第３節　Ｂ地区の調査……14
第４節　Ｃ地区の調査……16
第４章　総　括……23

挿　図

第１図　板津焼山遺跡の位置（１：800,000）……2
第２図　板津焼山遺跡の位置と周辺の遺跡（１：50,000）……3
第３図　板津焼山遺跡の位置（１：15,000）……4
第４図　調査区位置図（１：2,000）……6
第５図　加工段 SX01・竪穴建物 SI01 平面図（１：80）……7
第６図　Ａ地区全体図（１：200）……8
第７図　Ａ地区中央部土層図（１：60）……8
第８図　Ａ地区遺構土層図（１：20）……8
第９図　Ａ地区出土遺物実測図（１）（１：３）……9
第 10 図　Ａ地区出土遺物実測図（２）（１：３）……10
第 11 図　Ａ地区出土遺物実測図（３）（１：３）……11
第 12 図　Ａ地区出土遺物実測図（４）（１：３）……12
第 13 図　Ａ地区出土遺物実測図（５）（１：２，１：３）……13
第 14 図　Ｂ地区全体図（１：200）……14
第 15 図　Ｂ地区土層図（１：60）……14
第 16 図　土坑 SK02 土層図（１：20）……14
第 17 図　Ｂ地区出土遺物実測図（１：２，１：３）……15
第 18 図　Ｃ地区全体図（１：200）……16
第 19 図　Ｃ地区土層図（１：80）……16
第 20 図　竪穴建物 SI02 平面図（１：80）……17
第 21 図　竪穴建物 SI02 土層図（１：40）……17
第 22 図　Ｃ地区遺構土層図（１：40）……17
第 23 図　竪穴建物 SI03 平面図（１：80）……18
第 24 図　Ｃ区出土遺物実測図（１：２，１：３）……19

図　版

図版 1

A 地区全景（西から）

A 区　加工段 SX01 と竪穴建物 SI01（北西から）

図版 2

SX01 土層確認状況（南から）

SX01 遺物出土状況（南東から）

図版 3

竪穴建物 SI01 全景（南から）

竪穴建物 SI01 遺物出土状況（北から）

図版 4

B 地区遠景（西から，神西湖を望む）

B 地区全景（北東から）

図版 5

C 地区全景（南東から）

竪穴建物 SI02 検出状況（西から）

竪穴建物 SI03 検出状況（西から）

図版 6

A 地区出土遺物（1）

図版 7

A 地区出土遺物（2）

図版 8

A 地区出土遺物（3）

図版 9

A 地区出土遺物（4）

図版 10

A 地区出土遺物（5）

図版 11

B・C 地区出土遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

当遺跡は，出雲市湖陵町板津に所在する。板津地区は，従来砂層が厚く埋蔵文化財の包蔵地の分布が認識されていなかった地区であり，これまでに民間業者による土砂採取（採砂）事業が行なわれてきた。平成 20 年（2008）度には，その採砂後の土地を区画整理し，市道及び住宅地にするという計画がたちあがった（開発総面積 4.2ha）。

この計画は，出雲市湖陵町板津土地区画整理組合によって進められてきたが，工事中に遺物包含層が確認された。試掘調査の結果，遺物包含層の他，遺構も確認できる可能性があったため，平成 22 年（2010），事業者から依頼を受けた出雲市教育委員会が発掘調査を実施した。遺物包含層は，３箇所に散在していたため，Ａ地区・Ｂ地区・Ｃ地区と地区名を付け，調査を実施した（調査総面積約 800㎡）。

埋蔵文化財の事務手続は下記のとおりである。

平成 22 年（2010）11 月 19 日　出雲市湖陵町板津土地区画整理組合（以下，組合）から島根県教育委員会（以下，県教委）へ「遺跡発見の届出について」を提出。

平成 22 年 11 月 22 日　県教委から組合・出雲市教育委員会（以下，市教委）へ「遺跡の発見について」の通知。遺跡名称が板津焼山遺跡となる。

平成 23 年（2011）１月５日　組合から県教委へ文化財保護法第 94 条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘の通知について」を提出。

平成 23 年１月５日　市教委から県教委へ文化財保護法第 99 条第１項の規定により「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出。

平成 23 年４月 15 日　市教委から県教委へ「出雲市湖陵町板津土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取扱いについて（協議）」を提出。

平成 23 年４月 15 日　市教委から県教委へ「埋蔵文化財保管証」を提出。

平成 23 年４月 15 日　市教委から出雲警察署へ「埋蔵物発見届」を提出。

平成 23 年４月 22 日　県教委から市教委へ「遺跡の取り扱いについて」の回答。

平成 23 年５月２日　県教委から市教委へ「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」の通知。

第２節　発掘作業の経過

発掘調査は，平成 23 年（2011）１月 11 日にＡ地区より開始した。発掘当初は，砂層に遺物包含層があると考えていたが，サブトレンチで確認したところ，主に遺物を包含するのは砂層下の粘質土であることが判明したため，重機にて砂層を除去した。

粘質土層を人力で掘下げ，地山直上で遺構を確認した。遺構の検出及び図化作業を進め，４月 15 日に全ての現地調査を終了した。報告書作成は，平成 24 年（2012）度に実施した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の地理的環境

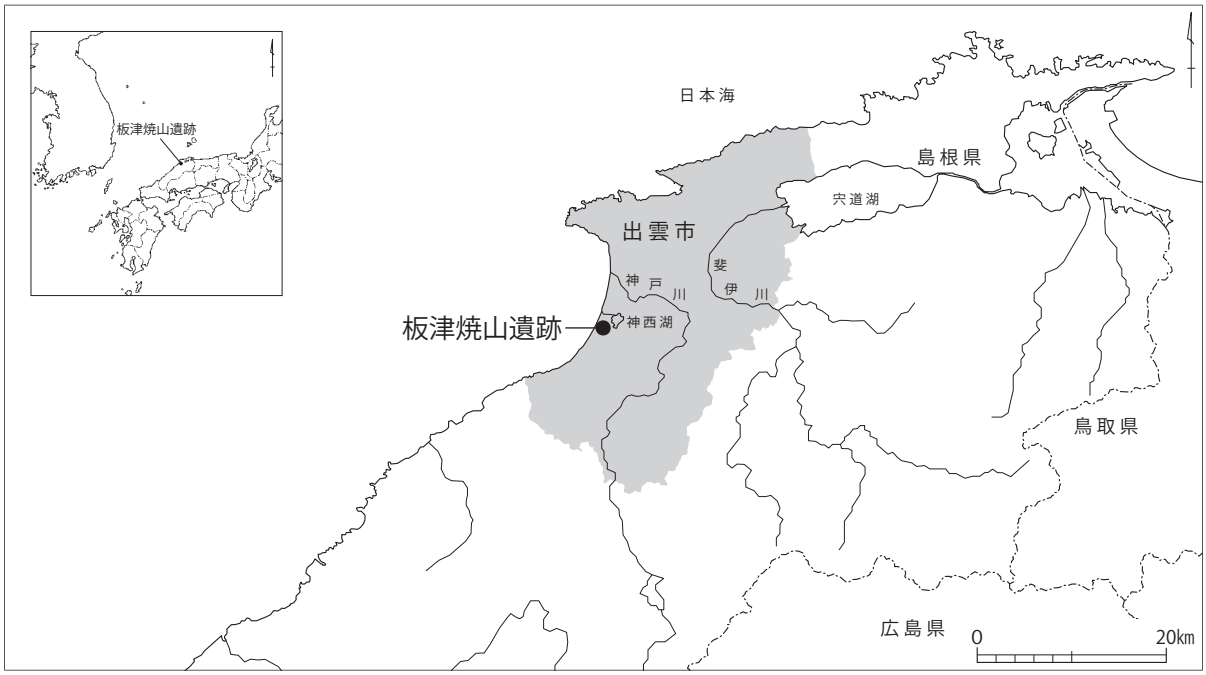
遺跡の位置する出雲市は，島根県東部，宍道湖の西部地域にあたる。面積は，624.13㎢，出雲市役所本庁舎（出雲市今市町）は，北緯 35 度 21 分 50 秒，東経 132 度 45 分 26 秒にある。北部は島根半島，中央部は出雲平野，南部は中国山地に接し，市域を北流する一級河川斐伊川・神戸川，さらに宍道湖とも接する。平成 17 年（2005）３月の広域合併により出雲市，平田市，湖陵町，佐田町，多伎町，大社町が合併，さらに平成 23 年（2011）10 月に斐川町が編入合併して，現在の出雲市となっている（第１図）。

湖陵町域は，神西湖の南地区（江南地区）と北地区（西浜地区）に分かれ，当遺跡は日本海に面する西浜地区（出雲市湖陵町板津）に入り，出雲市大社町の大社湾から続く長大な海浜の西南端にあたる出雲砂丘上に立地している（第３図）。

第２節　遺跡の歴史的環境

湖陵町の遺跡は，主に神西湖南側の江南地区に集中しており，北側の西浜地区では遺跡の存在は十分わかっていなかった。当遺跡は，これまでごくわずかにしか確認されていない砂層下の遺跡が，採砂事業によって確認された貴重な事例である。出雲市湖陵町周辺における歴史的なあゆみを概観したい（第２図）。

旧石器時代は，近年，発掘調査が実施された多伎町多岐字砂原所在の砂原遺跡からは，約 12 万年



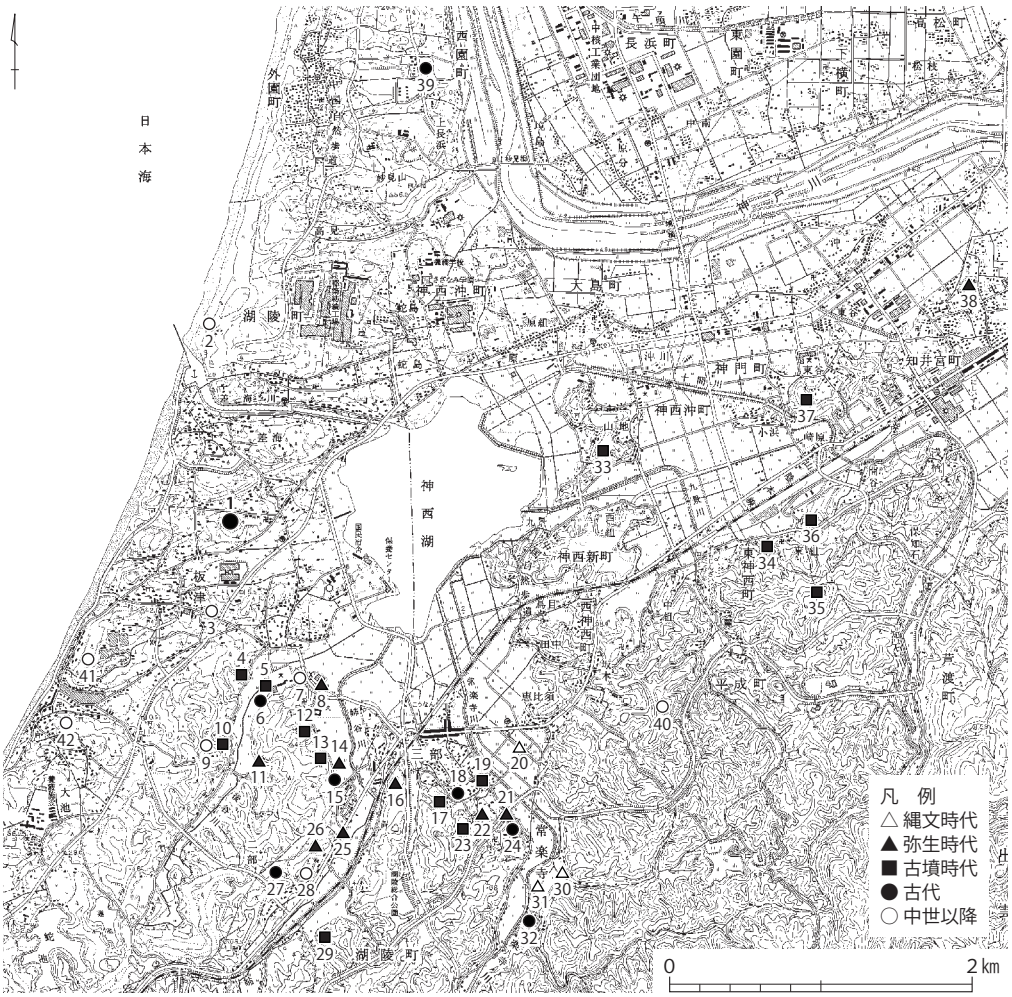
第１図　板津焼山遺跡の位置（1：800,000）

前とされる石片が確認されており，石器であることが確実となれば，日本最古段階に位置づけられる。

縄文時代草創期の湖陵町付近は，宍道湖から出雲平野の間に形成されていた谷の左岸側に位置していた。神西湖は存在せず，常楽寺川・姉谷川・後谷川による谷が形成されていた。早期末に始まる縄文海進によって，出雲平野から宍道湖にかけて広大な内湾（古宍道湖）が形成された。神西湖と周辺の低地の大部分は内湾の一部となった。出雲市内では，中原Ⅱ遺跡（6），西園町上長浜貝塚（39）や大社町菱根遺跡からは，早期末の遺物が出土している。また，湖陵町の三部竹崎遺跡（20）や御領田遺跡（31）では，縄文時代後期の遺物が出土しており，当時も神西湖は内湾の環境だった。御領田遺跡では縄文時代後期中葉の竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代は，斐伊川と神戸川から流出した土砂が内湾を埋め立てて，出雲平野の原形が形成されていった時代である。内湾（古宍道湖）は平野によって二つの水域に隔てられ，これがのちに東の宍道湖，西の神西湖となっていく。

前期の遺跡として集落跡は確認されていないが，姉谷恵比須遺跡（25）や三部竹崎遺跡（20）から前期の壺が出土している。中期の遺跡は，神西湖周辺部においては，中島遺跡（16）のみが知られる。後期になると遺跡の数は増加する。低地では只谷Ⅰ・Ⅱ遺跡（26），三部八幡下遺跡（14），西安原遺跡（8），田中谷貝塚，低丘陵では庭反Ⅰ・Ⅱ遺跡（21），竹崎遺跡，雲部Ⅰ・Ⅱ遺跡（22），上長浜遺



1 板津焼山遺跡
2 欠山台場跡
3 板津遺跡
4 水原横穴墓群
5 中原Ⅰ遺跡
6 中原Ⅱ遺跡
7 日出城跡
8 西安原遺跡
9 助造り古墓
10 打蒔田古墳
11 東沢田遺跡
12 本要寺古墳群
13 八幡宮横穴墓群
14 三部八幡下遺跡
15 保知石谷遺跡
16 中島遺跡
17 倉道古墳群
18 畑田南遺跡
19 森の前古墳群
20 三部竹崎遺跡
21 庭反Ⅰ・Ⅱ遺跡
22 雲部Ⅰ・Ⅱ遺跡
23 雲部古墳群
24 常楽寺遺跡
25 姉谷恵比須遺跡
26 只谷Ⅰ・Ⅱ遺跡
27 只谷Ⅲ遺跡
28 姉谷城跡
29 柿木田古墳
30 奥ノ谷遺跡
31 御領田遺跡
32 滝ノ尻遺跡
33 山地古墳
34 九景川遺跡
35 北光寺古墳
36 間谷東古墳
37 神門横穴墓群
38 知井宮多聞院遺跡
39 上長浜貝塚
40 神西城跡
41 大池台場跡
42 惣荒神社祭祀跡

第２図　板津焼山遺跡の位置と周辺の遺跡（１：50,000）

跡（39）から後期の弥生土器が出土している。

古墳時代に入ると，神西湖の東側の低丘陵に造られた山地古墳（33）がある。直径 24m の円墳で，埋葬施設は，箱形木棺２基と箱形石棺１基である。木棺から二神二獣鏡と珠文鏡が各１面と筒形銅器２点が出土している。また，柿木田古墳（29）は，前期の前方後円墳の可能性がある。

中期の古墳としては，神西湖南西の丘陵に造られた東神西町の北光寺古墳（35）と湖陵町の雲部３号墳（23）が知られる。北光寺古墳は，全長 65 mの前方後円墳で出雲西部地域では最大規模である。

後期の古墳は，上塩冶地域・神戸川下流域に集中しており，神西湖周辺に大きな古墳は築造されていない。湖陵町常楽寺から大池にかけて６遺跡 43 基の横穴墓が確認されている。西浜地区で確認された事例は，大池横穴墓１基にとどまる。

奈良・平安時代の遺跡は，湖陵町常楽寺の御領田遺跡，庭反遺跡，姉谷の只谷遺跡など 10 遺跡が確認されている。三部から常楽寺にかけての低丘陵において遺跡が確認されており，西浜地区（出雲市湖陵町の北側砂丘地帯）においては，ほとんど遺跡が見つかっていない。上長浜貝塚は，出雲市西園町上長浜に所在し，奈良時代の貝塚が発見されている。

『出雲國風土記』（733 年）の「薗の長浜」項に，本遺跡の周辺についての記載がある。すなはち「砂

第３図　板津焼山遺跡の位置（１：15,000）

が飛び散り，また流れてこの松林を被い埋め，やがて，全部埋まってしまうのではなかろうか。」とあり，砂丘の移動が大きかったことを物語っている。また，湖陵町がある神西湖周辺地域は，神門郡滑狭（なめさ）郷に属する。『風土記』によると，斐伊川を境に出雲平野の東部と北部からなる出雲郡と，南は飯石郡と，西は石見国安濃（あんの）郡と接し，郡域は現在の出雲市の中央部から南部，および大田市山口町を含む。

中世は，佐々木氏による出雲国の守護支配の時代である。佐々木泰清は，出雲国の守護所を塩冶郷（出雲市塩冶町付近）に置き支配を行った。出雲国西部地域では，稲頼（いなより）荘が成立した。荘域は，湖陵町三部から二部にかけての地域と考えられる。周辺に残る中世の山城は，神西城跡（40）が神西氏の居城として有名であり，関連して日出城跡（7）などが注目される。また，庭反Ⅱ遺跡（21）や常楽寺遺跡（24）などでは，中世土師器とともに白磁や青磁など中世の輸入陶磁器も出土している。

近世においては，三部八幡下遺跡（14）や保知石谷遺跡（15）など低湿地に墓や杭列，建物跡などが見つかっており，江戸時代の後半頃に生活を営むようになったと考えられる。しかし，西浜地区において中世以降の遺跡はほとんど見つかっていない。大池の惣荒神社祭祀跡（42），大池台場跡（41），差海の欠山台場跡（2）が知られているが，いずれも近世以降の遺跡である。

引用・参考文献

山根正明　1993「湖陵町と周辺の中世城館について（1）」『湖陵町誌研究』２　湖陵町教育委員会

西尾克己・守岡正司　1994「常楽寺遺跡と庭反Ⅱ遺跡の性格について」『湖陵町誌研究』３　湖陵町教育委員会

野坂俊之ほか　1994『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―御領田遺跡・三部竹崎遺跡―』　湖陵町教育委員会

湖陵町史編纂委員会編　2000　『湖陵町誌』　湖陵町

野坂俊之　2000　『湖陵町遺跡地図』　湖陵町教育委員会

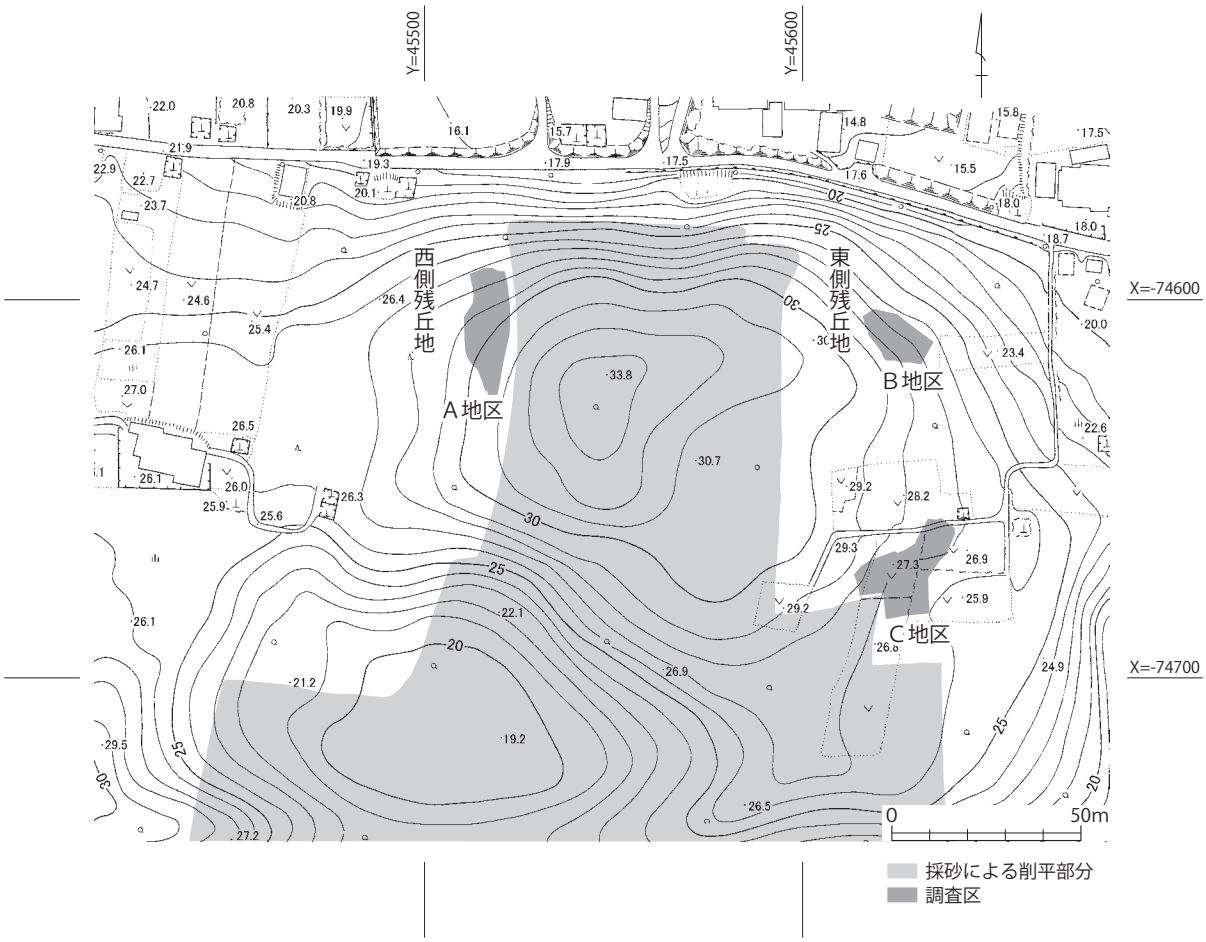
島根県古代文化センター　2012『出雲国風土記の研究Ⅳ　神門水海南辺の研究（資料編）』島根県古代文化センター調査研究報告書 46

調査の状況（A地区・南から）

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

本調査に先立って実施した試掘調査では，西側の採砂されていない箇所（西側残丘地）において，現地表面から約３ｍの厚みで無遺物の明黄褐色砂層が堆積しており，その下層に青灰色粘質土の遺物包含層が残存していることが判明した。遺跡の中央部は，採砂により土砂が大規模に削られており，遺物包含層についても削平された可能性が高かったため，調査対象範囲外とした。また，東側残丘地においては，遺物包含層は確認できなかったが，その後の造成工事によって遺物包含層を確認し，遺跡の広がりがあることが明確となった。Ａ地区・Ｂ地区・Ｃ地区の３地区に分け（第４図）調査を実施した。本調査は，上層の明黄褐色砂層を重機にて除去した後，Ａ地区から人力にて開始した。青灰色粘質土から精査を開始し，遺構検出作業を実施した。同様にＢ地区・Ｃ地区も明黄褐色砂層を重機にて除去し，青灰色粘質土から人力にて調査を行った。



第４図　調査区位置図（１：2,000）

第２節　Ａ地区の調査

Ａ地区（第６図）は，遺跡の北西部に位置し，発掘調査を実施した面積は約 270㎡である。丘陵の西斜面部分で，一部斜面をＬ字状にカットして平坦面を造成している。

現地表面から約５ｍの厚みで明黄褐色土の砂層（無遺物層）が確認できる。砂層の下層から層序を確認した（第７図）。明青灰色砂質土層からが遺物包含層である。丘陵中心部からの流れ込みの土砂であろうか，遺物は小片が大半である。加工段 SX01 の覆土と考えられる青灰色粘質土から大形の遺物破片が確認でき，さらに下層から竪穴建物 SI01 の覆土である橙色粘質土と暗灰色粘質土が互層状に堆積し，住居床面となる。さらに下層に茶褐色粘質土が堆積し，以下地山となる。

検出遺構（第５～８図，図版１～３）

加工段 SX01（第６・７図）

SX01 は，西向き隅丸コの字形の加工段である。規模は，下端で南北 9.0 m，東西 3.0 mである。上端の規模は，一部削られており不明である。Ａ地区で主に遺物が出土するのは，この SX01 の覆土中である。

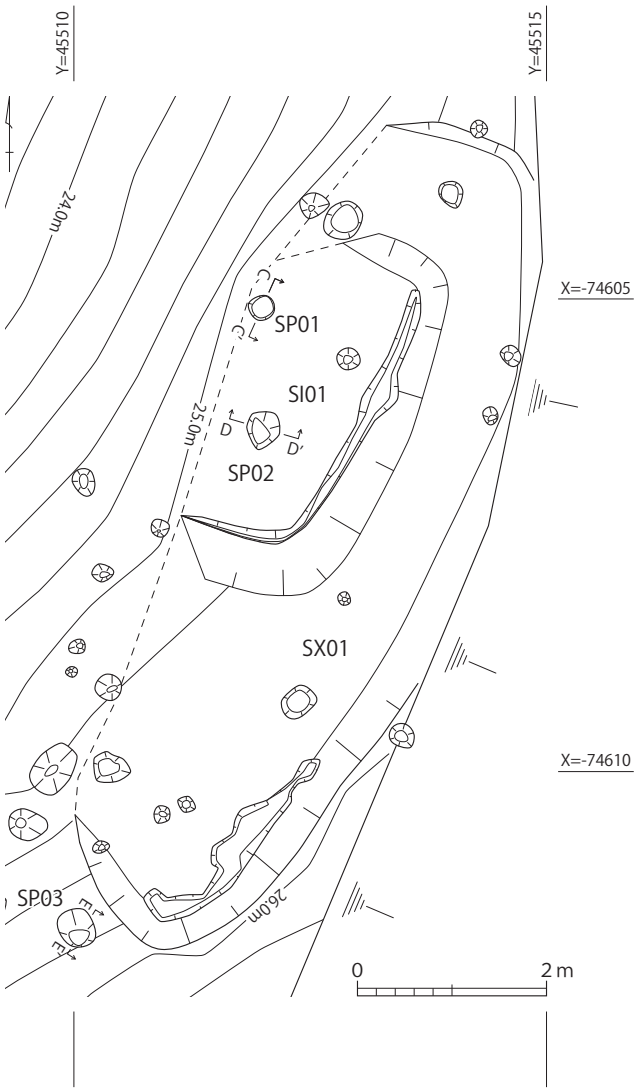
竪穴建物 SI01（第５・７図）

西向き隅丸コの字形の竪穴建物である。規模は，上端で南北 4.0 m，東西 1.6 mで，SX01 内の中央部やや北寄りに位置している。柱穴等の並びは確認できないが，覆土中から竈，土製支脚等炊飯具も出土している。

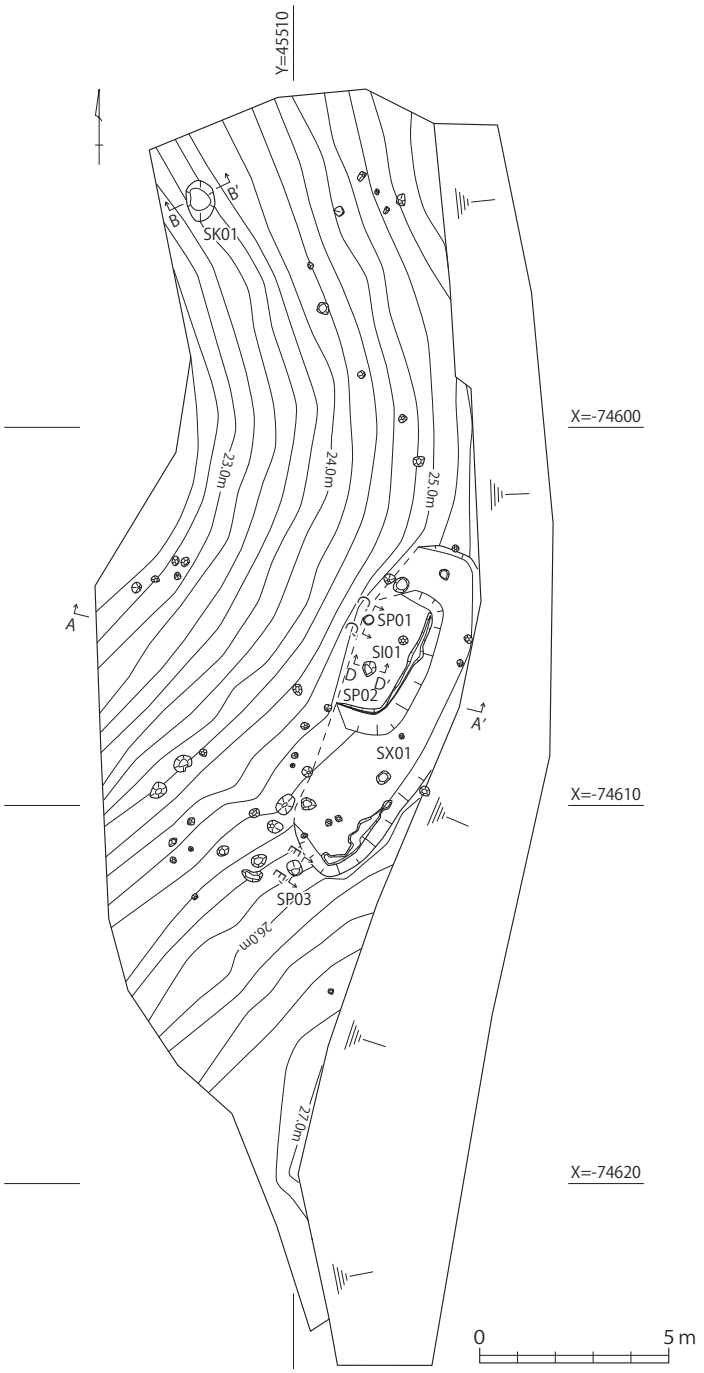
年代については，住居覆土から出雲６期の須恵器（第９図７）が出土していることから，７世紀中葉以降に埋没したと考えられる。その他，土製支脚・移動式竈の破片なども出土しており，時期的には７世紀の中葉の時期と考えられる。

土坑 SK01（第６・８図）

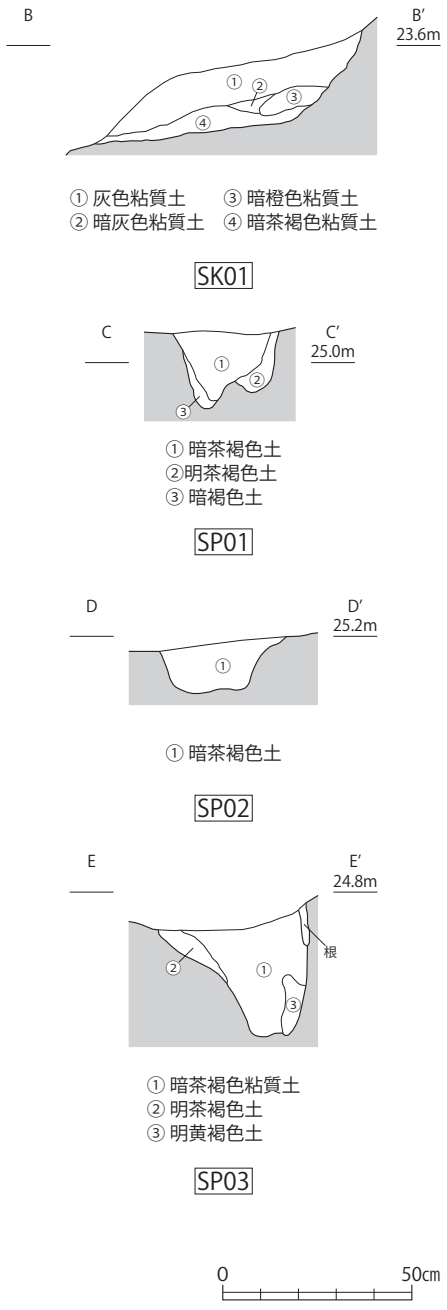
Ａ地区北西部で確認した遺構である。南北 1.0 m，東西 0.6 mの楕円形で深さは 0.18 mを測る。出土遺物等はなく，性格は不明である。



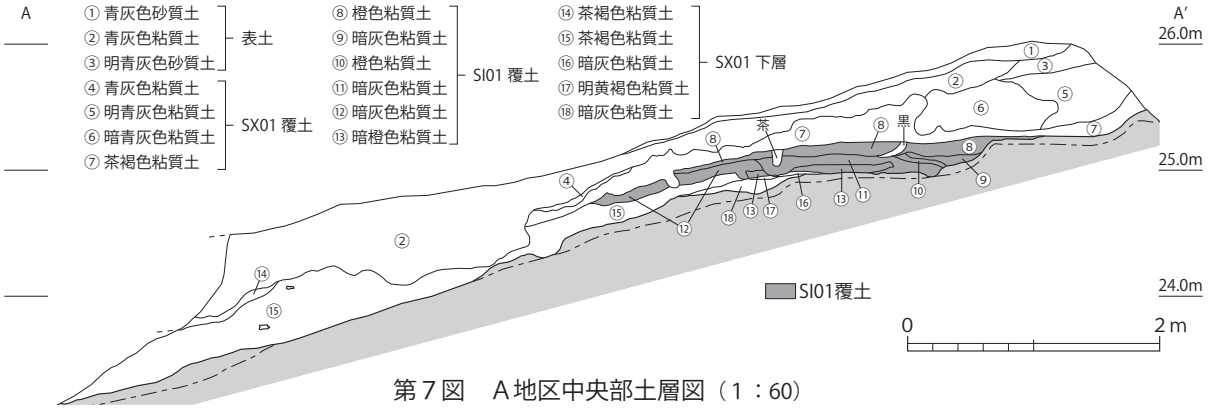
第５図　加工段SX01・竪穴建物SI01平面図（１：80）



第６図　Ａ地区全体図（１：200）



第８図　Ａ地区遺構土層図（１：20）



第７図　Ａ地区中央部土層図（１：60）

SP01（第５・８図）

SX01 内中央部で確認したピットである。南北 0.3 m，東西 0.3 mの円形で，深さは 0.2 mを測る。上面検出時は，柱穴と考えていたが，土層観察からは柱穴とは言いがたい。

SP02（第５・８図）

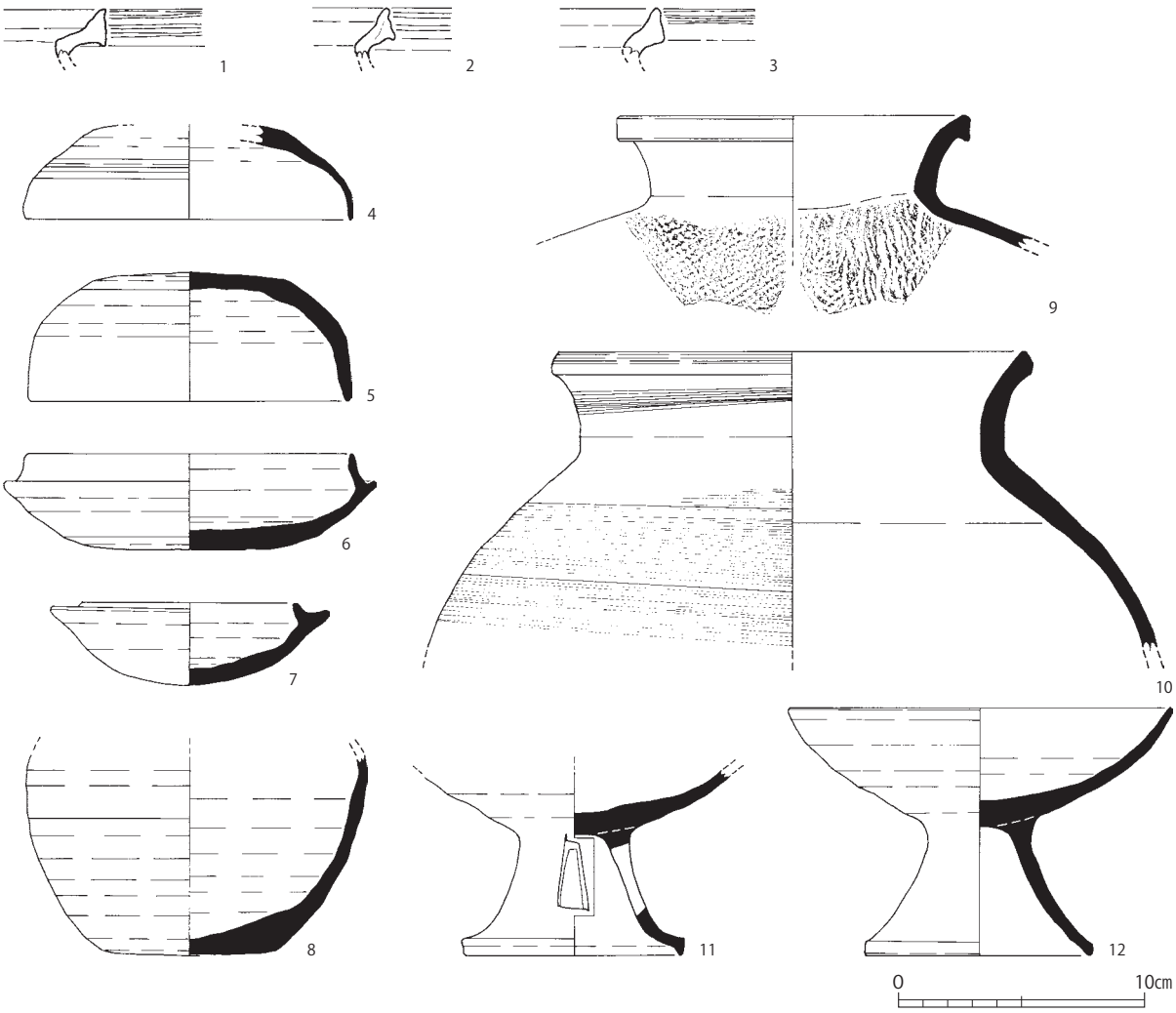
SX01 内中央部で確認したピットである。南北 0.30 m，東西 0.33 mの不整楕円形で，深さは，0.14 mを測る。SP01 と同じように柱穴とは言いがたい。

SP03（第５・８図）

SX01 の南側で確認したピットである。南北 0.40 m，東西 0.38 mの不整円形で，深さは 0.30 m を測る。ピットが SB01 方向に内傾しており，柱穴とも考えられるが，他のピットとの並びは確認できなかった。

出土遺物（第９図～第 13 図，図版６～図版 10）

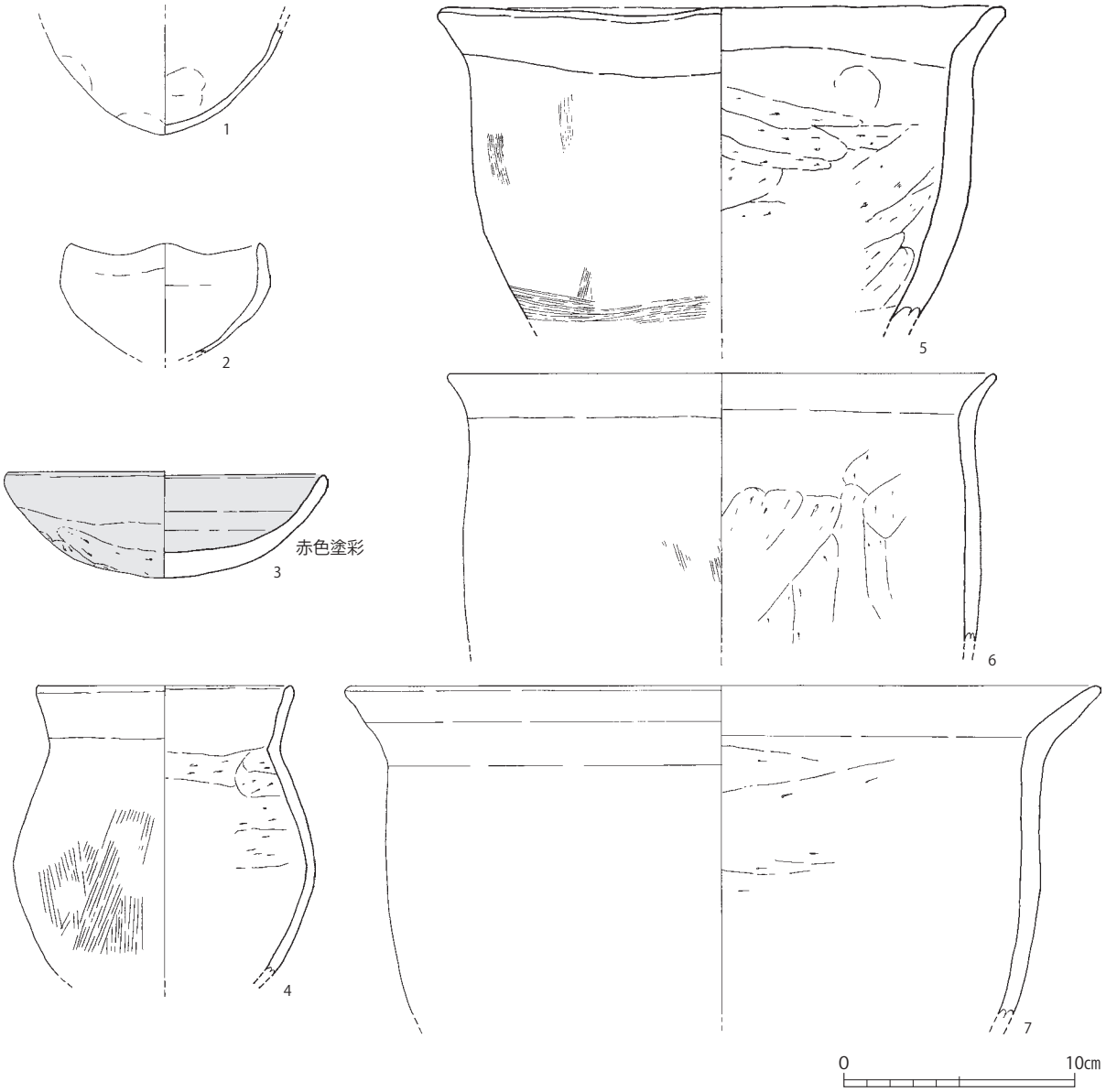
Ａ地区からは，弥生土器・須恵器・土師器・製塩土器・土錘・竈・土製支脚などが出土している。第９図１～３は弥生土器である。弥生中期の甕口縁部である口縁部に凹線文が施される。４～ 12 は，



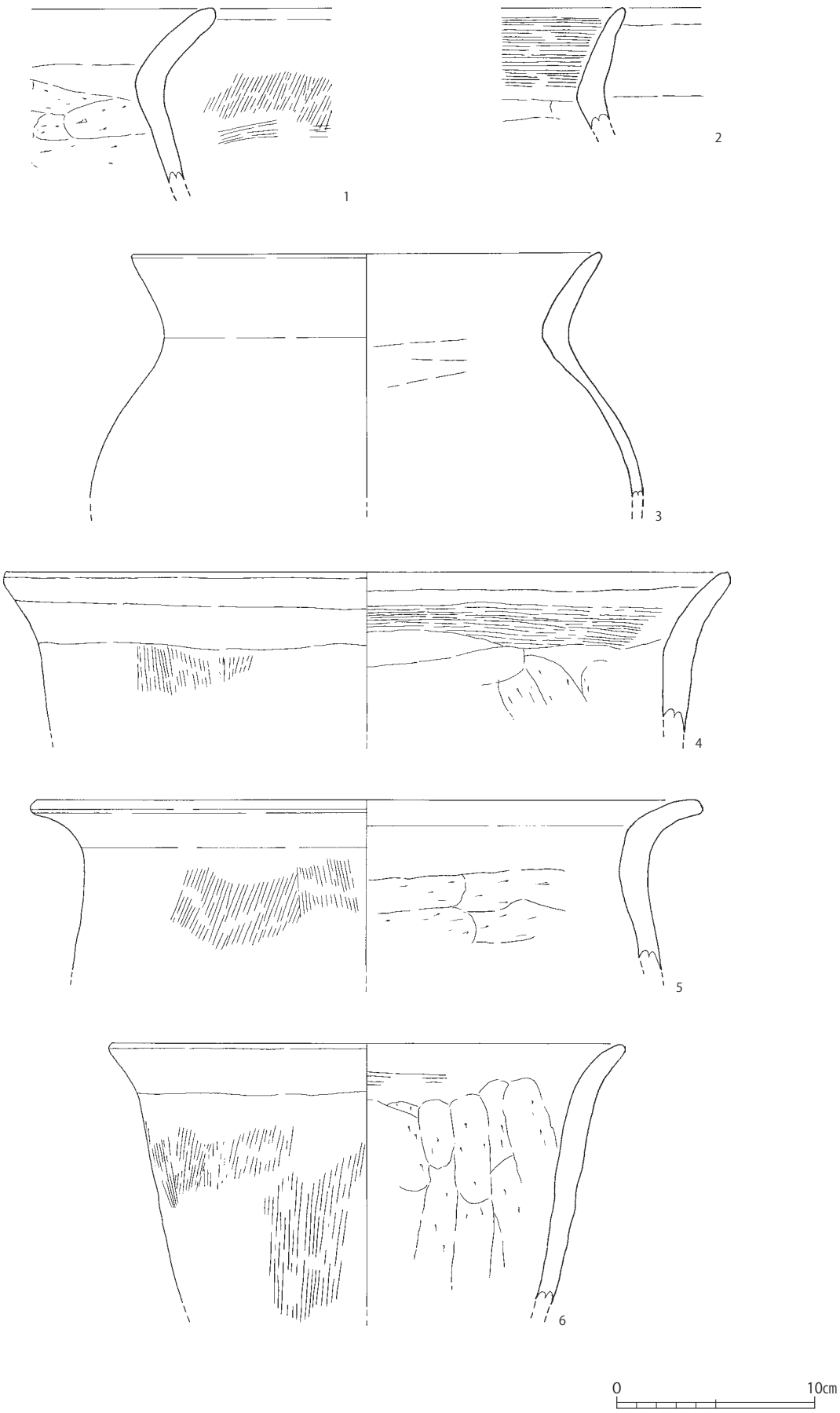
第９図　Ａ地区出土遺物実測図（1）（1：3）

須恵器である。４は杯蓋で，大谷編年の出雲４期，５が壺蓋である[1]。６・７は杯身で，６は大谷編年出雲４期，７は出雲６期である。８は，長頸壺の底部である。出雲５期であろうか。９は，横瓶の口縁部，10 は壺の口縁部である。11・12 は，無蓋高杯である。11 は，１段２方向の透かしがあり出雲５期である。

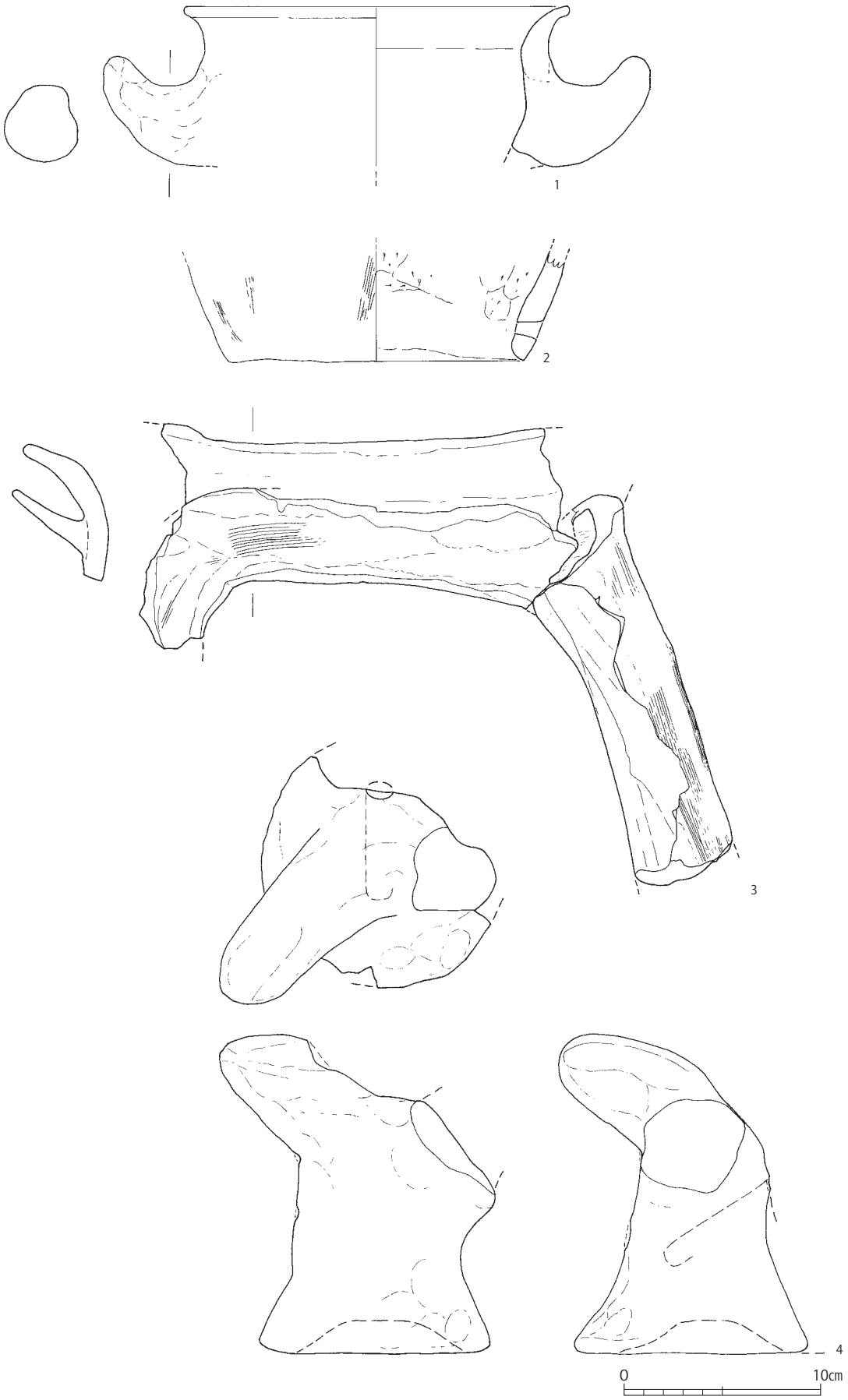
第 10 図１・２は尖底椀形の製塩土器で「鹿蔵山式」の製塩土器である。７世紀中葉である[2]。３は土師器の杯であり内面･外面に赤色の塗彩がある。4～７及び第11図１～６は単純口縁の甕であり，頸部がくの字状に屈曲する。内面頸部以下ケズリ調整を行っている。第 12 図１は，甑の把手部分であろう。口縁部から把手部分にかけ残存している。２は，甑の体部下辺である。端部付近に貫通する円孔を穿つ。４は，土製支脚である。２方向突起で胴部背面に径７㎜の非貫通孔がある（岩橋分類ＩＣ類[2]）。第 13 図１～５は土錘である。１は，管状土錘である。２～５は，棒状土錘であり[3]，周辺で漁撈が行われていた可能性を示す遺物である。６～ 13 は，土師器の高杯である。全体的に器壁が厚く，内面のケズリ調整が確認でき粗雑な土器もある。



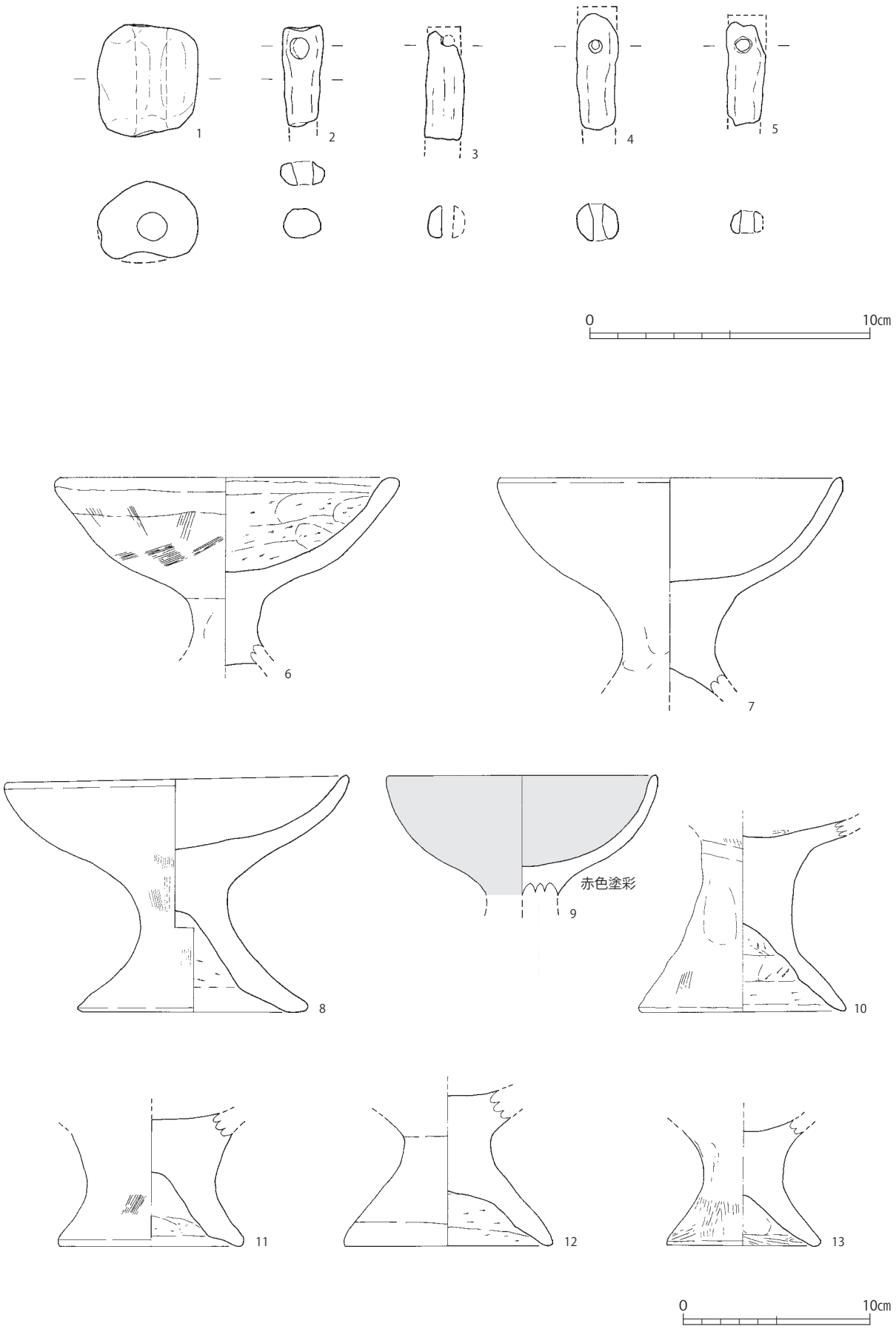
第 10 図　Ａ地区出土遺物実測図（2）（1：3）



第 11 図　Ａ地区出土遺物実測図（3）（1：3）



第 12 図　Ａ地区出土遺物実測図（4）（1：3）

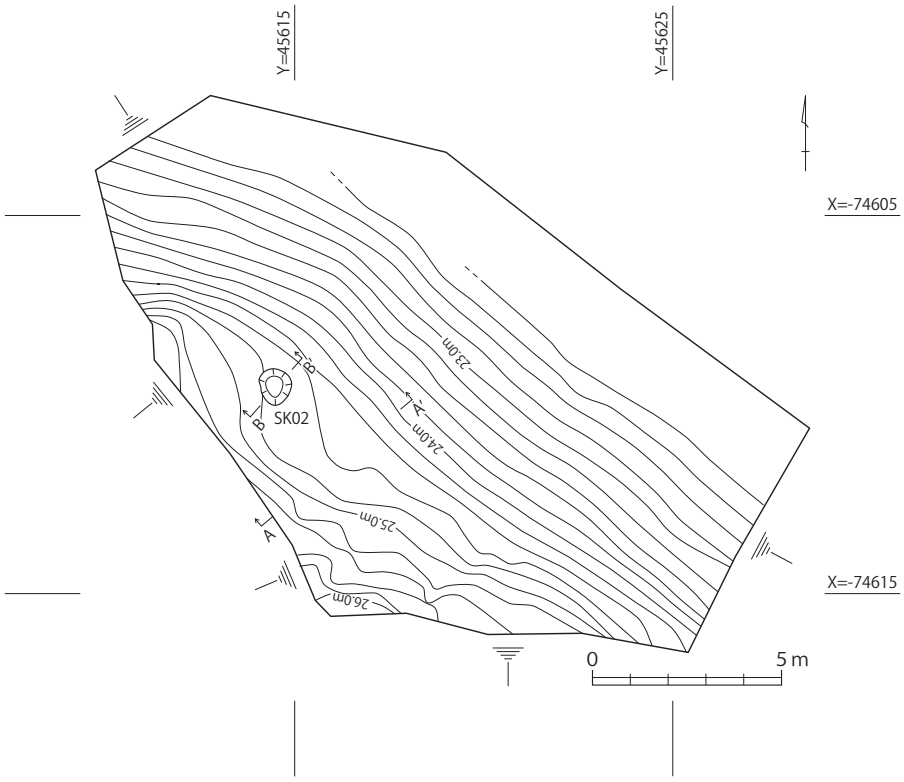


第 13 図　Ａ地区出土遺物実測図（5）（上図1：2，下図1：3）

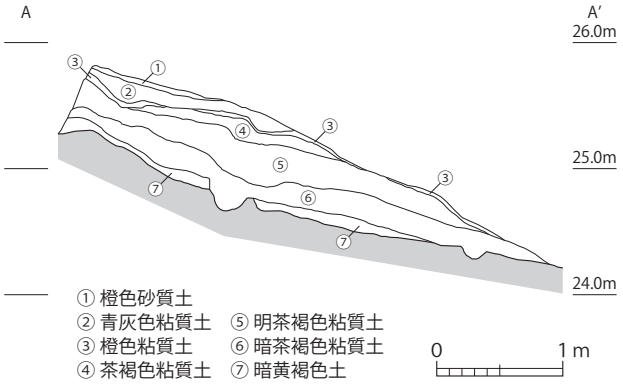
第３節　Ｂ地区の調査

Ｂ地区（第 14 図）は，遺跡の北東部に位置し，発掘調査を実施した面積は約 162㎡である。丘陵の北斜面部分である。Ａ地区の出土量と比較すると遺物の出土量は極端に少ない。明確な遺構については，確認していないが，地山直上から黒曜石製の石鏃が出土している。また，覆土からの出土であるが縄文時代早期末（菱根式）の土器も確認した。

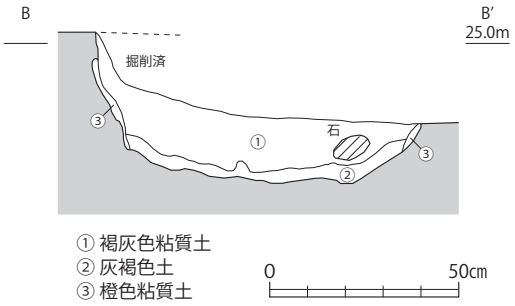
層序（第 15 図）は，Ａ地区と同じく現地表面から約５ｍの厚みで明黄褐色土の砂層が確認できる。この層は無遺物層である。砂層の下層，第 15 図②青灰色粘質土～⑦暗黄褐色土が遺物包含層である。丘陵中心部からの流れ込みの土砂であろうか，遺物は小片が大半である。



第 14 図　Ｂ地区全体図（1：200）



第 15 図　Ｂ地区土層図　（1：60）



第 16 図　土坑 SK02 土層図（1：20）

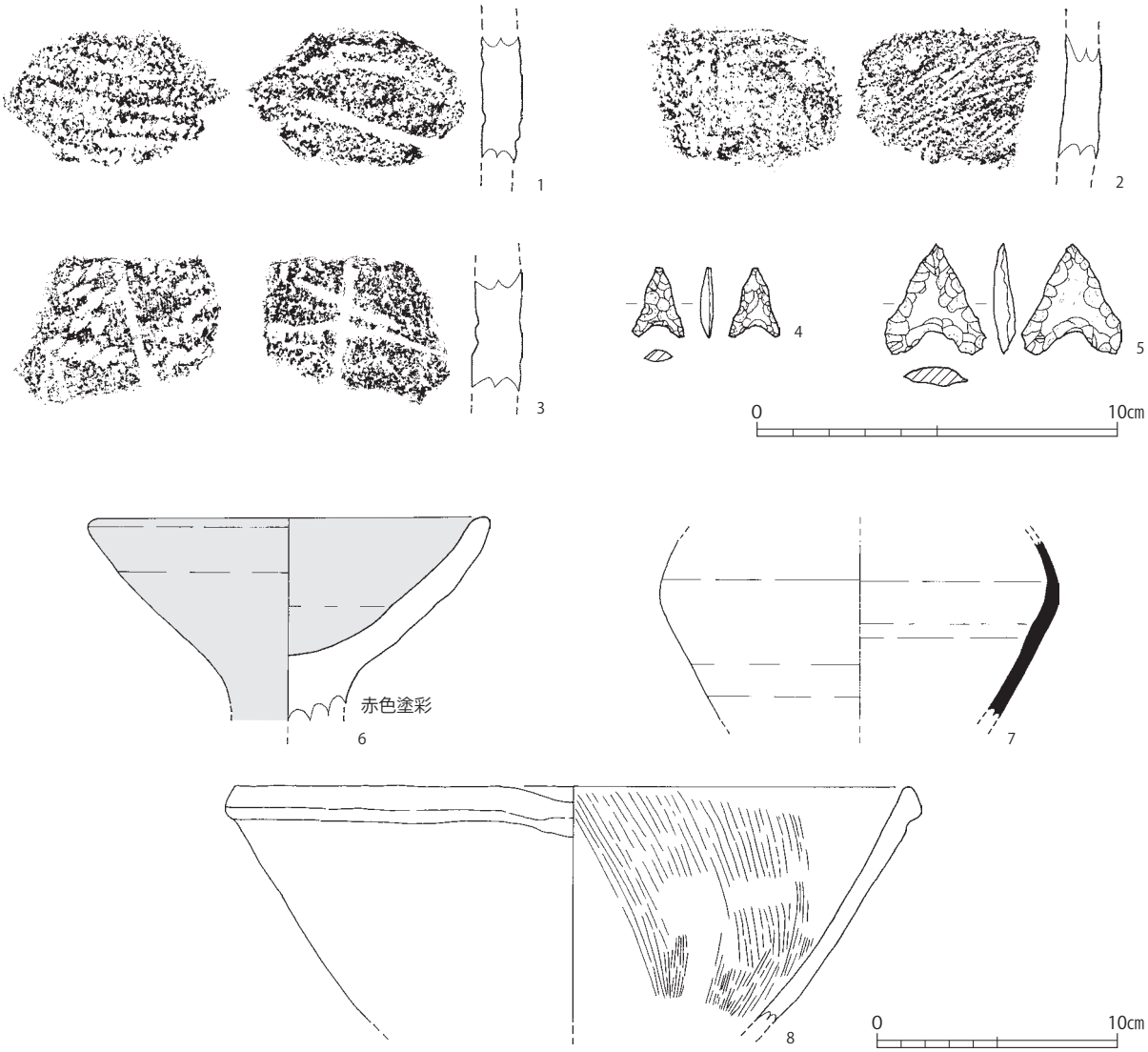
検出遺構

土坑 SK02（第 14・16 図）

Ｂ地区西部の緩斜面で確認した遺構である。南北 1.0 m，東西 0.8 mの不整円形で，深さは，表土掘削時に一部削られているが，約 0.4 m程度である。遺構中から土師器のすり鉢（第 17 図８）が出土しているが，性格は不明である。

出土遺物（第 17 図・図版 11）

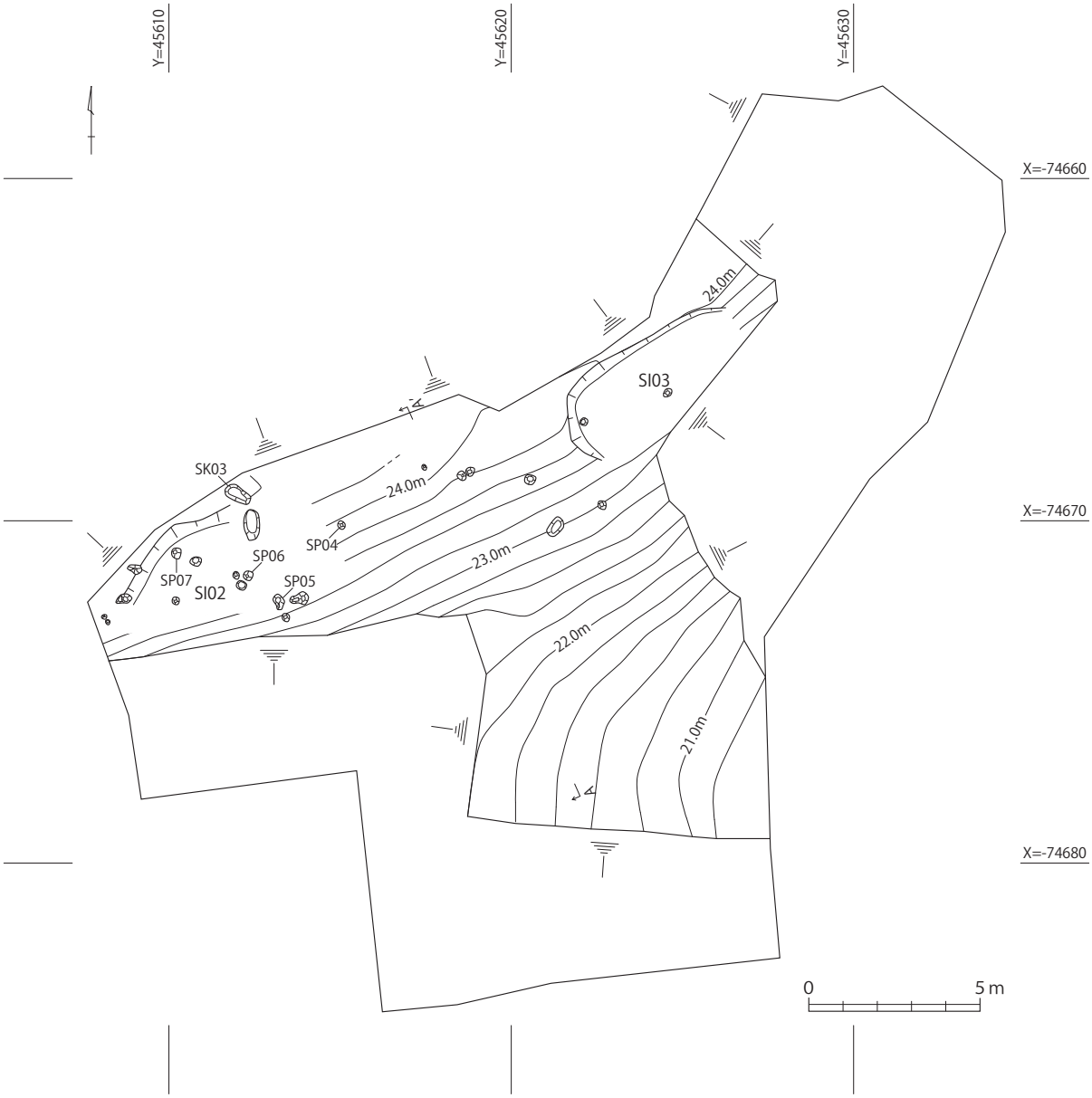
１～３は，縄文土器である。早期末の菱根式である。１は，内外面に縄文がある。２は，外面に縄文，内面に条痕文と若干の縄文が確認できる。３は，外面に縄文，内面は，若干の縄文は確認できるが，磨耗により不明瞭である。４・５は黒曜石製の石鏃である。６は，土師器の高杯である。内面・外面に赤色の塗彩がある。７は須恵器の長頸壺である。体部のみの残存である。やや肩の張る出雲３期の遺物であろうか。８は，土師器のすり鉢である。口縁部は玉縁状である。



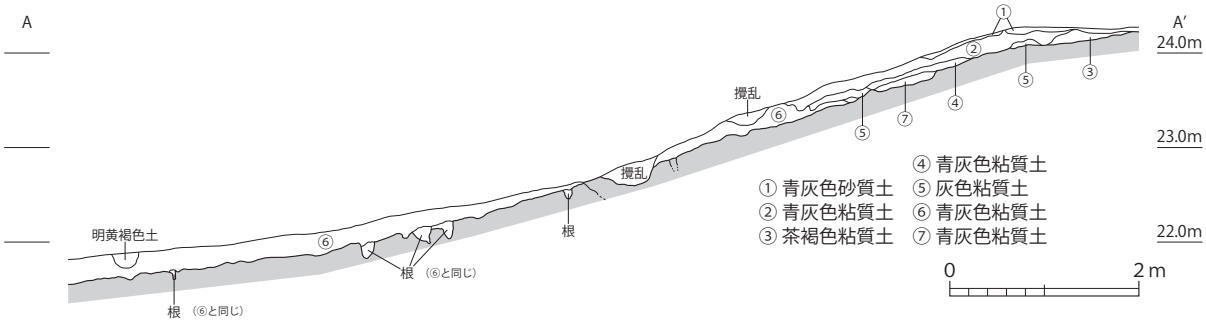
第 17 図　Ｂ地区出土遺物実測図（上図１：２，下図１：３）

第４節　Ｃ地区の調査

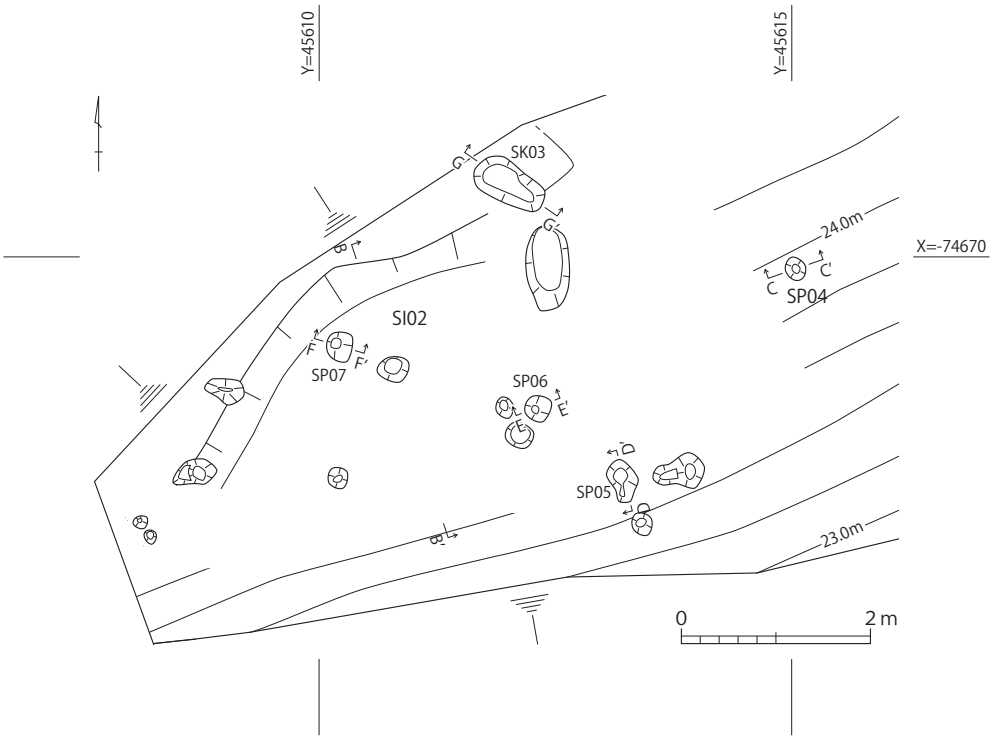
Ｃ地区（第 18 図）は，遺跡の南東部に位置し，発掘調査を実施した面積は約 369㎡である。丘陵の南斜面部分で，斜面をＬ字状にカットして住居面を形成している。



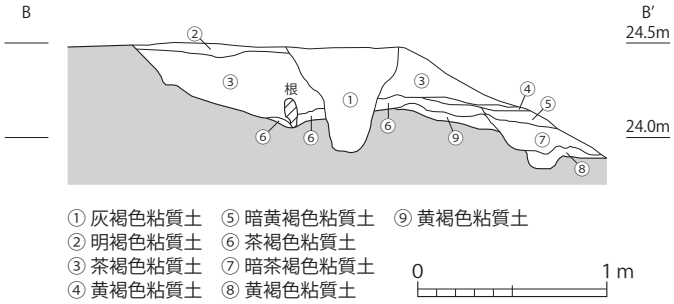
第18図　Ｃ地区全体図（１：200）



第 19 図　Ｃ地区土層図　（１：80）

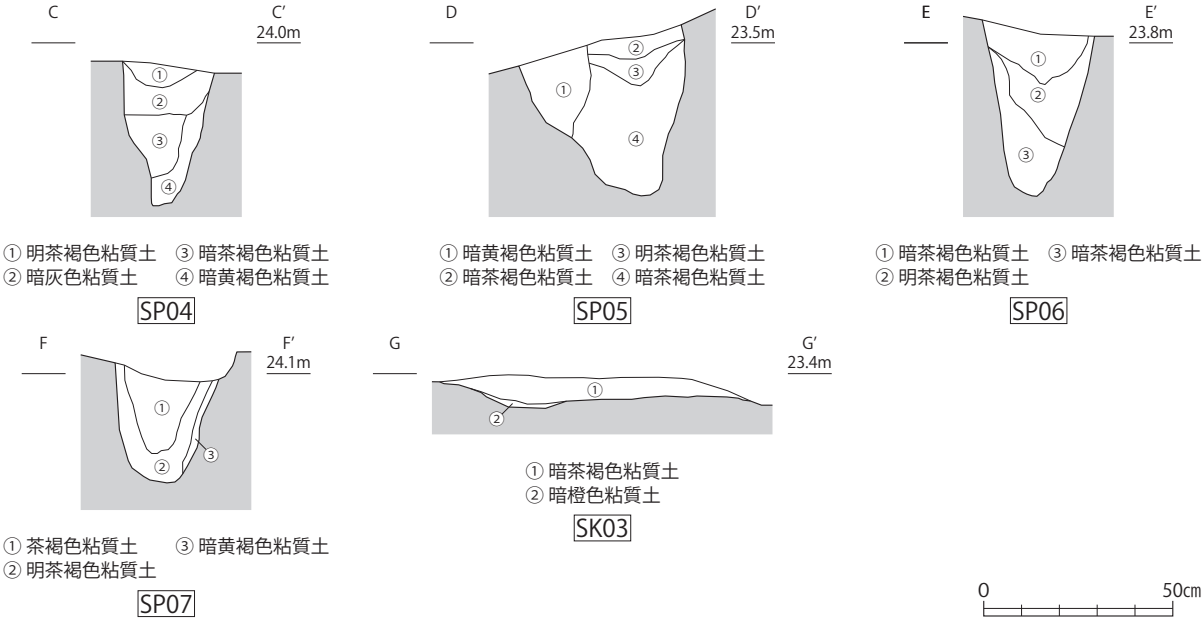


第 20 図　竪穴建物SI02平面図（1：80）

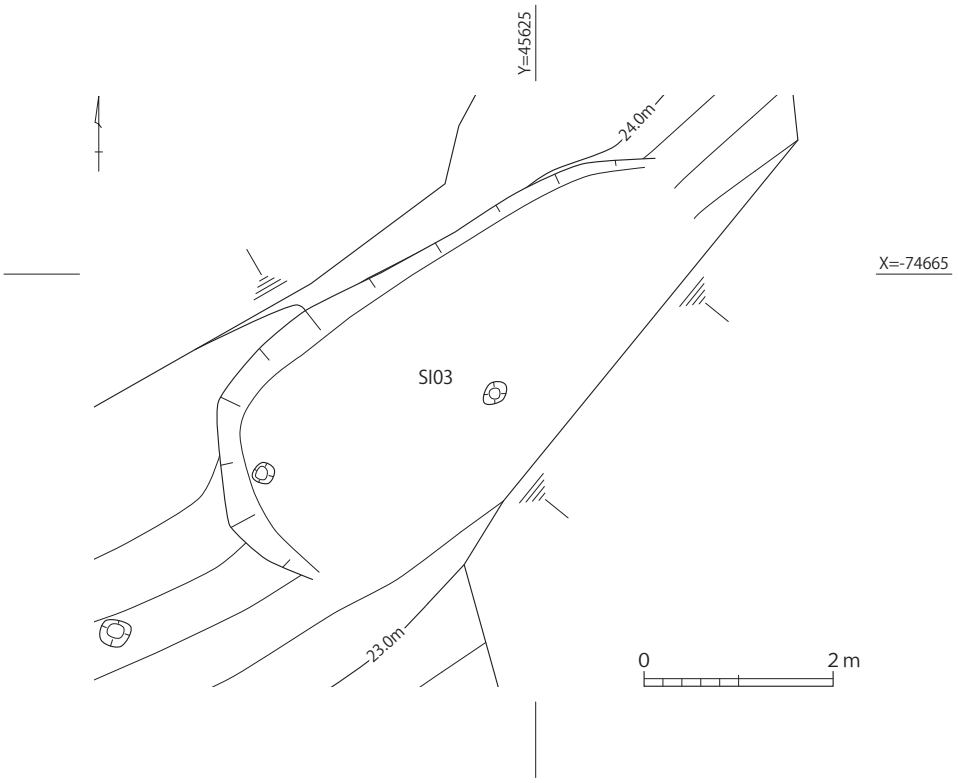


① 灰褐色粘質土　⑤ 暗黄褐色粘質土　⑨ 黄褐色粘質土
② 明褐色粘質土　⑥ 茶褐色粘質土
③ 茶褐色粘質土　⑦ 暗茶褐色粘質土
④ 黄褐色粘質土　⑧ 黄褐色粘質土

第 21 図　竪穴建物SI02土層図（1：40）



第 22 図　Ｃ地区遺構土層図（1：40）



第 23 図　竪穴建物SI03平面図（１：80）

層序（第 19 図）は，A・B 地区同様に現地表面から約５ｍの厚みで明黄褐色土の砂層が確認できる。この層は無遺物層である。砂層の下層，青灰色粘質土から遺物が出土する。丘陵中心部からの流れ込みの土砂であろうか，遺物は小片が大半である。SI02・03 の覆土と考えられる赤褐色粘質土から大形の遺物破片が確認できる。以下地山となる。

検出遺構

竪穴建物 SI02（第 20・21 図）

SI02 は，南向き隅丸コの字形の竪穴建物跡である。規模は，東西７ｍ，南北３ｍの加工段を形成している。炉跡や柱穴等の並びは確認できない。茶褐色粘質土（第 21 図の③および⑥）が覆土であり，炭化物の混じる第 21 図の⑨層上面が床面と考えられる。

SI02 の年代については，覆土及び床面から年代決定をする遺物が出土していないため，不明と言わざるを得ないが，SI03 とほぼ同じ標高に位置していることから，７世紀末～８世紀前半段階の住居跡と推測する。

SI02 の床面とその東方に小穴（ピット）４箇所がある（P04 ～ 07）。

SP04（第 20・22 図）は，C 地区の中央西寄り，SI02 の東側で確認した。南北 0.22 ｍ，南北 0.20 ｍの円形で，深さ 0.37 ｍを測る。土層観察から柱穴である可能性があるが，並びは確認できない。

SP05（第 20・22 図）は，C 地区 SI02 の中央部で確認したピット。南北 0.45 ｍ，東西 0.26 ｍの不整長楕円形で，深さ 0.45 ｍを測る。土層観察から柱穴である可能性があるが，並びは確認できない。

SP06（第 20･22 図）は，Ｃ地区 SI02 の中央部から確認したピットである。南北 0.30 m，東西 0.30 mの隅丸方形で，深さ 0.44 mを測る。土層観察から柱穴である可能性があるが，並びは確認できない。

SP07（第 20･22 図）は，Ｃ地区 SI02 内の北部，壁面付近から確認したピットである。南北 0.27 m，東西 0.24 mの隅丸方形で，深さ 0.28 mを測る。土層観察から柱穴である可能性があるが，並びは確認できない。

竪穴建物 SI03（第 23 図）

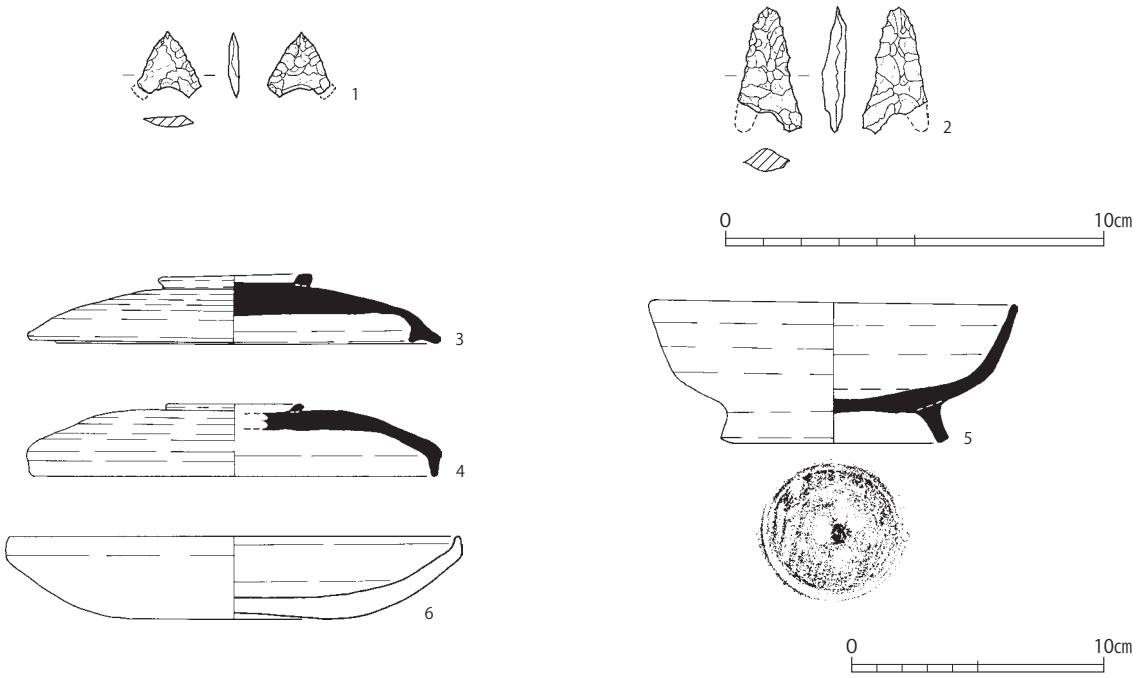
SI03 は，南向き隅丸コの字形の住居跡である。規模は，東西６m，南北３mの加工段を形成している。炉跡や柱穴等の並びは確認できないが，住居跡床面から須恵器の高台付杯（第 24 図５）が１点出土している。出雲Ⅲ期（7 世紀末～ 8 世紀前半）のものである [(4)]。

土坑 SK03（第 20・22 図）

Ｃ地区 SI02 外北東部で確認した皿状の土坑である。長辺 0.80 m，短辺 0.38 mの不整楕円形である。深さは 10㎝と浅い。底部から暗橙色の粘土を確認しており，炭もまとまって出土したことから，火を使用した痕跡と考えられる。

出土遺物（第 24 図・図版 11）

１・２は，黒曜石製の石鏃である。SI02 の覆土中より２点出土している。３～６は，SI03 周辺から出土した須恵器・土師器である。３・４は須恵器の杯蓋で，出雲Ⅲ期である。５は，須恵器の高台付杯で出雲Ⅲ期であり，外面底部に刺突文が残る。SI03 の床面付近から出土した遺物である。６は，土師器の皿である。



第 24 図　Ｃ区出土遺物実測図（上図１：２，下図１：３）

註・参考文献

（1）大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会

（2）内田律雄　1995 「古代出雲の塩と鉄」『出雲世界と古代の山陰』古代王権と交流７　名著出版

（2）岩橋孝典　2003 「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第 11 号　島根県古代文化センター

（3）土錘については，出雲市西園町の上長浜貝塚からも多数出土している。報告書によれば，棒状土錘は，瀬戸内型土錘とも呼ばれ，主に瀬戸内海に面した遺跡から見つかっており，奈良時代後半から平安時代初期にかけて，主に使用されている（川上　稔ほか　1996 『上長浜貝塚』出雲市教育委員会）。

（4）岡田裕之・土器検討グループ　2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』島根古代文化センター

遺物観察表

【A 地区】

（ ）は復元値

挿図	番号	種　別	器　種	出土位置	出土層位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調　整	胎土	焼　成	色　調	備　考
9	1	弥生土器	甕	SI01	床面付近				内面：ナデ 外面：ナデ	普通	やや不良	淡黄褐色	弥生中期　口縁部　凹線文
9	2	弥生土器	甕	SX01	茶褐色土				内面：ナデ 外面：ナデ	密	普通	褐色	弥生中期　口縁部　凹線文
9	3	弥生土器	甕	SX01	青灰色粘質土				内面：ナデ 外面：ナデ	密	普通	淡黄褐色	弥生中期　口縁部　凹線文
9	4	須恵器	杯蓋	SX01	赤褐色土	(13.0)			内面：回転ナデ 外面：ヘラオコシ	密	良好	灰色	出雲4期
9	5	須恵器	壺蓋	SX01	赤褐色土	(12.7)		5.15	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密	良好	黄灰色	
9	6	須恵器	杯蓋	SX01	茶褐色土	(13.0)		3.8	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密	良好	灰色	最大径（15.0cm） 出雲4期
9	7	須恵器	杯蓋	SX01		8.6		3.3	内面：回転ナデ 外面：ヘラオコシ	密	良好	灰色	最大径 11.2cm 体部内面に「×」のヘラ記号 出雲6期
9	8	須恵器	長頸壺	SX01	茶褐色土層		6.9		内面：回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密	良好	灰色	胴部最大径 13.6cm 出雲5期か
9	9	須恵器	横瓶	SI01	床面付近	(14.0)			内面：同心円状充て具痕 外面：タタキ	密	良好	灰色	
9	10	須恵器	壺	SX01		(18.8)			内面：充て具で横ナデ 外面：ヨコナデ（カキ目）	密	良好	灰色	
9	11	須恵器	高杯	SX01	青灰色粘質土		8.5		内面：回転ナデ 外面：回転ヘラケズリの後 回転ナデ	密	良好	灰色	1 段 2 方向方形透かし 出雲5期
9	12	須恵器	高杯	A 地区		(15.2)	8.9	9.9	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	密	良好	灰色	低脚無蓋
10	1	土製品	製塩土器	SX01	茶褐色土				内面：ナデ 外面：ナデ	密	良好	淡黄褐色	鹿蔵山式
10	2	土製品	製塩土器	SX01		(8.0)			内面：ナデ 外面：ナデ	密	良好	にぶい黄橙色	鹿蔵山式
10	3	土師器	杯	SX01	赤褐色土	13.6		5.5	内面：ナデ 底部外面：ヘラケズリ 外面：ナデ	やや粗	良好	橙褐色	内・外面赤色塗彩
10	4	土師器	甕	SX01		10.8			内面：ケズリ 外面：ハケ	密	良好	褐色	外面に煤付着
10	5	土師器	甕	SI01	床面付近	(24.1)			内面：ケズリ 外面：ハケ	密	良好	褐色	外面に煤付着
10	6	土師器	甕	SX01		(25.5)			内面：ケズリ 外面：ハケ	密	良好	淡褐色	外面に煤付着
10	7	土師器	大甕	SI01	床面付近	42.7			内面：ケズリ 外面：風化	普通	良好	浅黄橙色	
11	1	土師器	甕	A 地区					内面：ケズリ 外面：ハケ	密	良好	淡褐色	
11	2	土師器	甕	SI01	床面付近				内面：ケズリ 外面：ハケ	密	良好	褐色	外面に煤付着
11	3	土師器	甕	SX01		(23.4)			内・外面：風化により不明	普通	良好	浅黄橙色	
11	4	土師器	甕	A 地区		(36.2)			内面：ケズリ 外面：ハケ	やや粗	良好	褐色	外面に煤付着
11	5	土師器	甕	A 地区		33.2			内面：ヨコケズリ 外面：ハケ	密	良好	淡黄褐色	
11	6	土師器	甕	SX01		(25.4)			内面：ケズリ 外面：ハケ	密	良好	淡褐色	
12	1	土師器	甑	SX01		(19.1)				普通	良好	にぶい黄橙色	把手
12	2	土師器	甑	A 地区		(14.8)				密	良好	淡褐色	下部円孔あり
12	3	土製品	竈	SI01	床面付近					密	良好		庇あり
12	4	土製品	土製支脚	SI01	床面付近			16.1	内・外面：風化により不明	普通	良好	明赤褐色	2 方向突起，胴部背面に非貫通孔（岩橋分類ＩＣ類）

（　）は復元値

挿図	番号	種　別	器　種	出土位置	出土層位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調　整	胎土	焼　成	色　調	備　考
13	1	土製品	土錘	SX01	青灰色粘質土	外径 3.55	内径 1.05	長さ 3.95		普通	良好	橙色	管状
13	2	土製品	土錘	SX01	青灰色粘質土					密	良好	にぶい橙色	棒状
13	3	土製品	土錘	SI01	床面付近					密	良好	淡褐色	棒状
13	4	土製品	土錘	SX01						密	やや不良	淡橙褐色	棒状
13	5	土製品	土錘	SX01						密	不良	黒褐色	棒状
13	6	土師器	高杯	A 地区		(17.6)			内面：ケズリ 外面：ハケ	やや粗	普通	淡褐色	脚部外面に指頭圧痕あり
13	7	土師器	高杯	A 地区		(10.8)			内・外面：風化により不明	密	良好	淡橙褐色	
13	8	土師器	高杯	SX01	青灰色粘質土	(18.1)	(12.2)	12.6	内面：風化 外面：風化（一部ハケ）	普通	良好	浅黄色	
13	9	土師器	高杯	SX01		(12.1)			内・外面：風化により不明	密	良好	淡橙褐色	内・外面赤彩
13	10	土師器	高杯	A 地区			10.7		杯部：内面：ミガキ 外面：ハケ 脚部：内面：ケズリ 外面：ハケ	密	普通	淡褐色	脚部内面に黒斑
13	11	土師器	高杯	A 地区			(9.6)		内面：ケズリ 外面：ハケ	密	良好	淡褐色	
13	12	土師器	高杯	SI01	床面付近		(10.7)		内面：ケズリ 外面：ハケ	密	不良	褐色	風化著しい
13	13	土師器	高杯	A 地区			(7.8)		内面：ハケ 外面：ハケ	やや粗	良好	淡褐色	脚部内面に指頭圧痕あり

【B 地区】

（　）は復元値

挿図	番号	種　別	器　種	出土位置	出土層位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調　整	胎土	焼　成	色　調	備　考
17	1	縄文土器	甕	B 地区	包含層				内面：縄文 外面：縄文	粗	良好		菱根式（早期末）
17	2	縄文土器	甕	B 地区	包含層				内面：条痕文，縄文 外面：縄文	粗	良好		菱根式（早期末）
17	3	縄文土器	甕	B 地区	包含層				内面：縄文 外面：縄文	粗	良好		菱根式（早期末）
17	4	石製品	石鏃		包含層	長さ 1.95	幅 1.40	厚さ 0.33					黒曜石 重量 0.5g
17	5	石製品	石鏃		包含層	長さ 3.00	幅 2.75	厚さ 0.52					黒曜石 重量 3.2g
17	6	土師器	高杯	東側	包含層	16.0			内・外面：風化により不明	普通	良好	赤褐色	内・外面赤色塗彩
17	7	須恵器	長頸壺	西側	包含層				内・外面：回転ナデ	密	良好	灰色	出雲Ⅲ期か
17	8	土師器	すり鉢	SX02		(28.0)			内面：ハケ 外面：ナデ	密	やや不良	淡黄褐色	口縁部玉縁状

【C 地区】

（　）は復元値

挿図	番号	種　別	器　種	出土位置	出土層位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調　整	胎土	焼　成	色　調	備　考
24	1	石製品	石鏃	SI02	覆土中	長さ 1.75	幅 1.65	厚さ 0.32					黒曜石 重量 0.6g
24	2	石製品	石鏃	SI02	覆土中	長さ 3.30	幅 1.70	厚さ 0.6					黒曜石 重量 2.2g
24	3	須恵器	杯蓋	SI03	覆土中	14.0		2.8	内面：回転ナデの後ナデ 外面：回転ヘラケズリの後 回転ナデ	密	良好	灰色	最大径 16.2㎝ 輪状つまみ 出雲Ⅲ期
24	4	須恵器	杯蓋	SI03	覆土中	(15.6)		2.8	内面：回転ナデの後ナデ 外面：回転ヘラケズリの後 回転ナデ	密	良好	灰色	最大径（16.2㎝） 輪状つまみ 出雲Ⅲ期
24	5	須恵器	高台付杯	SI03	床面付近	14.2	8.1	5.1	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラケズリの後 回転ナデ	密	良好	灰色	底部糸切り後高台をつける 底部に刺突文（ヘラ記号？） 出雲Ⅲ期
24	6	土師器	皿	SI03	覆土中	17.6	8.0	3.2	内・外面：風化により不明	密	やや不良	淡黄褐色	

第4章　総　括

今回の調査地では，明黄褐色の砂層が５ｍ以上の厚みをもって堆積しており，その直下から遺物・遺構を確認することができた。砂層下で確認した遺跡の性格を考えてみたい。７世紀中葉から８世紀前半の段階では，竪穴建物跡と考えられる遺構３基（SI01 ～ SI03）を確認し，Ａ地区の SX01 から管状土錘・棒状土錘が出土したことから，西に日本海，東に神西湖（もと神門水海）が位置する本遺跡では，海・湖を利用して漁撈も行っていたことが考えられる。また，甕形土器・甑形土器・土製支脚・移動式竈など炊飯具のセットが出土したことについては，山陰地域の炊飯具についてまとめた岩橋孝典氏が，「土製支脚の分布する地域では，基本的な炊飯具のセットは，甕形土器・甑形土器・土製支脚・移動式竈の４点である。」と述べている[1]。本遺跡においても，Ａ地区 SX01 において，炊飯具のセット関係が認められ，生活の痕跡が色濃く残る。

遺跡は，長期にわたって存続している。Ｂ地区からの縄文土器（菱根式・早期末）片の出土，Ａ地区からの弥生土器（中期）片の出土から，人の活動は縄文時代早期末にすでに始まり，その後，弥生時代中期に再開された。そして，７世紀から８世紀段階が最も出土土器の増える時期となる。これは，周辺での人々の活動が活発化したためであろう。しかしながら，８世紀の後半から人々の活動は断絶してしまう。飛砂の被害から住居として適地ではなくなったからであろうか。日本海岸の飛砂被害の歴史については，太田猛彦氏が，飛砂について次のとおり述べている。「かつての飛砂は，日本の海岸地域に住む人々に，現在では想像もできないほどの重大な被害をもたらすものであり，その量においては今とは決定的な違いがあった。とくに山形の庄内地方ではその深刻さが語り伝えられており，『一夜にして家一軒を埋める』とも言われた」とあるように[2]，当遺跡においても５ｍ以上の砂が堆積しており，飛砂の被害にあったと考えられる。

その飛砂については，『出雲國風土記』神門郡にも記されており，「神門水海。（中略）この湖と大海（日本海）との間には山があって，長さ 12.176km，幅 1.604km ある。これは，八束水臣津野命の国引きをされた時の綱である。今世人はこれを園の松山と呼んでいる。（中略）そして松林が繁っているが，四方からの風が吹くときは，砂が飛び散り，また流れてこの松林を被い埋め，今はもう年々に埋まって半ばが埋まっているだけとなっているから，恐らくやがて全部埋まってしまうのではなかろうか。（中略）」[3] と，その深刻さを物語っている。板津焼山遺跡では，過去の土砂採取地の残丘で土層観察した結果，遺物包含層が確認できた。同様に飛砂が確認できる事例として，出雲市西園町の上長浜貝塚では，奈良時代の貝塚が砂丘下 10 数mに埋もれていた[4]。また出雲市大社町の鹿蔵山遺跡も砂丘下 3.5 ｍで８世紀後半から９世紀の遺物包含層を確認している[5]。このように，日本海から吹き上げる風によって沿岸の広範囲で大きな砂の動き，つまり飛砂被害があったことを物語っている。

土砂採取が行われる前の地形図を見ると，今回の調査区はもと一つの丘陵の東・西の縁辺であり，丘陵本体の大部分は既に失われている。遺構の覆土から出土した須恵器・土師器を中心とする多量の

土器も丘陵中心部からの流れ込みの可能性も多分にあり，丘陵中心部に集落の中枢域が存在した可能性がある。

最後に，本遺跡周辺に広がる砂丘地形は，歴史時代における大きな砂の移動によって形成された可能性も考えられるため，厚い砂層の下に遺物包含層，特に８世紀以前の遺構面が存在する可能性を考慮する必要性があることを指摘しておきたい。

引用・参考文献

（1）岩橋孝典　2003 「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第 11 号　島根県古代文化センター

（2）太田猛彦　2012 『森林飽和　国土の変貌を考える』 NHK 出版

（3）加藤義成　1957 『修訂出雲国風土記参究』 松江今井書店

釈文は以下。

「神門水海。（中略）即ち水海と大海との間に山あり。長さ二十二里二百三十四里，広さ三里あり。此は意美豆努命の国引き坐しし時の綱なり。今俗人，号けて薗松山と云ふ。（中略）即ち松の林茂繁るも，四風吹く時は，沙飛び流れて，松の林を掩ひ埋む。今，年に埋もりて半ば遺れり。恐らくは遂に埋もれ已てむか。（中略）」

（4）川上　稔ほか　1996 『上長浜貝塚』 出雲市教育委員会

（5）石原　聡ほか　2005 『鹿蔵山遺跡』 大社町教育委員会

写　真　図　版

A 地区全景（西から）

A 区　加工段 SX01 と竪穴建物 SI01（北西から）

図版 2

SX01 土層確認状況（南から）

SX01 遺物出土状況（南東から）

竪穴建物 SI01 全景（南から）

竪穴建物 SI01 遺物出土状況（北から）

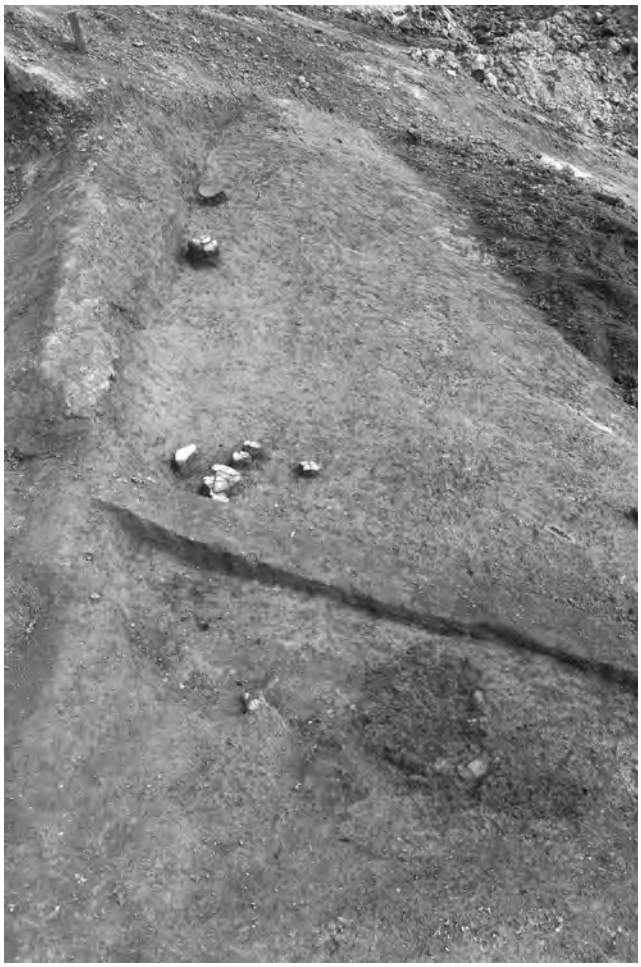
図版４

Ｂ地区遠景（西から，神西湖を望む）

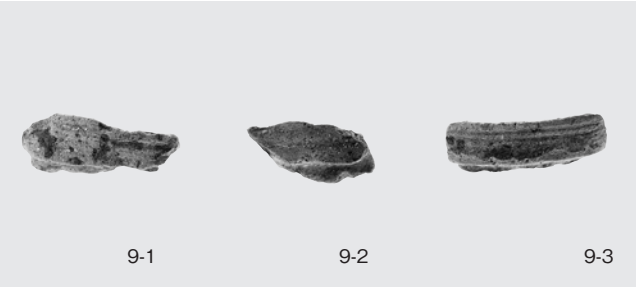
Ｂ地区全景（北東から）

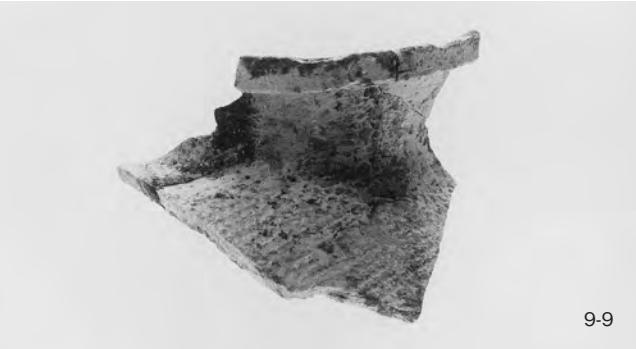
C 地区全景（南東から）

竪穴建物 SI02 検出状況（西から）



竪穴建物 SI03 検出状況（西から）





A 地区出土遺物（1）

10-1

10-2

10-3

10-4

10-5

10-6

10-7

A 地区出土遺物（2）

Ａ地区出土遺物（３）

13-11

13-13

13-12

13-7

13-10

13-8

A地区出土遺物（4）

13-1
13-2
13-3
13-4
13-5

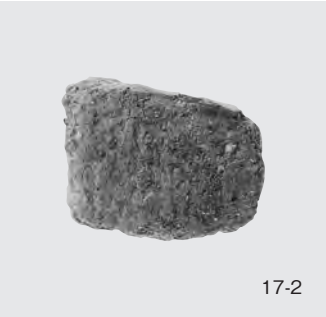
12-1

12-2

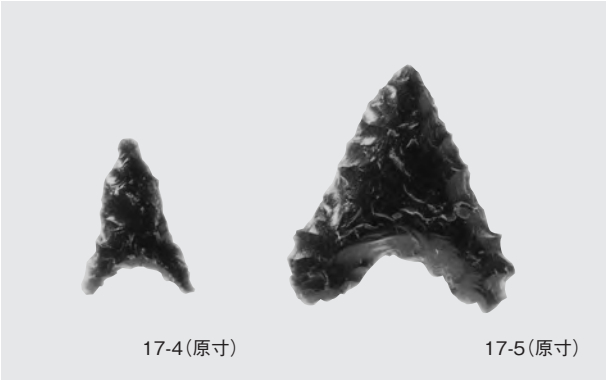
12-4

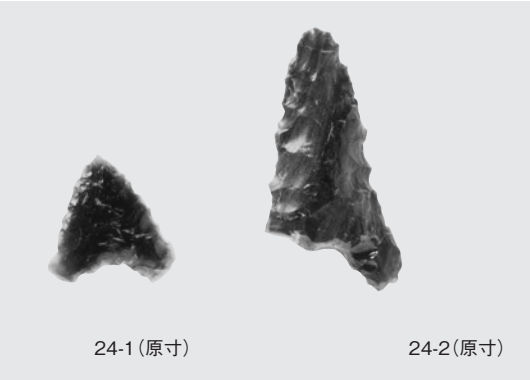
12-3

17-1


17-2

17-3


17-4（原寸）　17-5（原寸）


24-1（原寸）　24-2（原寸）

24-5

24-3

24-5（底面）

24-4

24-6

報告書抄録

ふりがな	いたづやけやまいせき
書　名	板津焼山遺跡
副書名	出雲市湖陵町板津土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	24
編著者名	石原　聡
編集機関	出雲市文化環境部文化財課
所在地	〒699-0011　島根県出雲市大津町 2760　TEL （0853）21-6893
発行年月日	平成 25 年 （2013）3 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
いたづやけやまいせき 板津焼山遺跡	しまねけんいずもしこりょうちょう 島根県出雲市湖陵町 いたづ 板津 717 番地外 103 筆	32203		35°19′33″	132°40′03″	20110111 ～ 20110415	801 ㎡	土地区画整理

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
板津焼山遺跡	集落	縄文早期～奈良	住居跡３	縄文土器，石鏃，弥生土器，土師器，須恵器，土錘，竈	

要　約	出雲市湖陵町板津の砂層下から見つかった遺跡である。土器は，縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器が出土している。石器は，石鏃４点が出土している。土製品として，土製支脚・竈・土錘が出土している。遺構としては，住居跡３基を確認している。住居跡は，８世紀段階で廃絶しており，日本海から吹き上げる飛砂による影響と考えられる。

平成 25 年(2013) 3 月発行

出雲市の文化財報告　24

出雲市湖陵町板津土地区画整理事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

板津焼山遺跡

発 行　出 雲 市 教 育 委 員 会
出雲市今市町70

編 集　出雲市 文化環境部 文化財課
出雲市大津町2760

印 刷　株式会社 報 光 社
出雲市平田町993